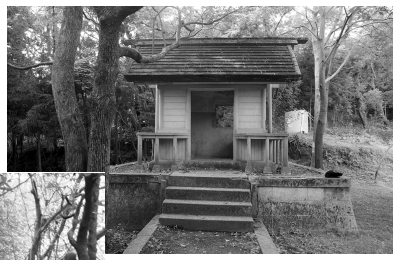
第2部

景観に刻印された人間の諸活動の痕跡を尋ねる

「海外神社」跡地とそのデータベース化



「海外神社」跡地に見る景観の変容とその要因

中島 三千男／津田 良樹／冨井 正憲

はじめに

本稿は、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の第3班「環境と景観の資料化と体系化」課題3「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」の「『海外神社』跡地グループ」の成果の一部である。

戦前、日本帝国の「勢力圏」の拡大に伴い、日本国及び日本人が、アジア太平洋地域に多くの神社＝〈海外神社〉を創建した。現在、その数は史料上確認されているものだけでも1600余社にのぼる。[(1)]

第3班課題3のテーマは大きく二つの側面から迫る事が目指されたが、われわれ「『海外神社』跡地グループ」（以下、グループと略記）は「様々な人間の活動が社会に残した痕跡の解読とそのデータ化」という側面から迫るものであり、また、とくにその「人間の活動」の中でも「主に政治的政策的な背景をもつもの」として、この「海外神社」跡地を素材にして考えて見ようというものであった。[(2)]海外神社は日本の敗戦とともに、少なからぬ神社が現地人によって、また日本人（軍）自身の手によって破却され、その機能は全ての海外神社で停止したが、われわれは、この「海外神社」跡地が、戦後60余年を経過するなかで、今日どのような形で存在しているのか、「海外神社」跡地そのものを非文字資料ととらえ、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という全体テーマ及び「環境と景観の資料化と体系化」という第3班のテーマに迫ろうというものである。

もちろん、「海外神社」跡地を素材として、COE全体のテーマ、またその中でも第3班のテーマに迫るという事について必ずしも勝算・見通しがあったわけではない。もともと、この「海外神社」跡地の研究がCOEの活動の中に位置づけられたのは、グループのメンバーの一人、中島が1990年から始めた「海外神社」跡地の調査があったからである。中島はCOEの活動が開始される2003年秋までに、旧台湾、旧満洲、旧関東州、旧中華民国、旧朝鮮、旧昭南島（シンガポール）の6地域45社の跡地調査を行っていた。[(3)]しかし、この段階の中島の「海外神社」跡地研究の問題意識は、戦前の、つまり海外神社が機能していた時期の、あくまでも歴史的研究を深め豊かにするためのイメージを得たいというものであった。その意味において厳密には研究ではなかった。

しかし、2003年の秋から開始されたCOEの研究は、「海外神社」跡地そのものを非文字資料・人間の活動の痕跡として、それを直接的な研究対象として、しかもそれを環境や景観と関わらせて研究しようというものであった。海外神社の研究は1990年代以降、たしかに長足の進歩を遂げているわけであるが、それは当然の事ながら、すべて海外神社が機能していた戦前の時期の研究で、戦後の跡地の研究などは皆無であった。[(4)]そういった意味では中島及びCOEの海外神社の跡地の研究は初めての取り組みであったが、それ故に、また困難を伴った。とりあえず、COEの活動を始めるにあたり共同研究者として、建築学を専攻している冨井正憲や津田良樹を加え、2003年10月には旧樺太の12社、[(5)]2004年8月には旧南洋群島の20社、[(6)]2005年8月には旧朝鮮の18社、[(7)]2006年8月には旧満洲の10社[(8)]と計60社の跡地調査を行ったが、そもそもどのような調査を行えば、このテーマに迫ることができるのか、2003年度及び2004年度の旧樺太、旧南洋群島までの調査は率直に言って試行錯誤の連続であった。

ようやく、2004年度の旧朝鮮の調査の前後から、ほのかに見えてきた方向は次の二つの方向であった。一つは、それぞれの「海外神社」跡地が戦後どのように変容していったのか、それは様々に変容していっているわけだが、その変容の仕方から、その地域と戦後日本との関係、あるいは、その地域の歴史や政治・経済・文化の問題を読み解くことができるのではないかという方向である。歴史研究に引きつけて言えば、いわば日本あるいは各国・各地域の戦後史・現代史の問題になるし、あるいは今、流行りの植民地の文化変容の問題、カルチュラルスタディの問題に連なる可能性を持ったものである。もう一つの方向は、戦前の海外神社、あるいは植民地支配の実態というものはどのようなものであったのか、これまでの文字史料だけの研究ではなかなかわからなかったものを、跡地の現地調査にもとづき、写真や地図、実測図などを駆使することによりその実態をより浮き上がらせることが出来るのではないかという方向である。こちらの方は、歴史研究に引きつけて言えば、戦前史の問題であるといえよう。

こうした、ベクトルの全く異なった二つの方向性が垣間見えてきたわけであるが、本稿は前者の方向性でまとめてみたのである。[9] 先に述べたように、これまで中島がCOEの開始以前に個人として海外神社の跡地を実際に訪れて調査した数は45社、COEの共同調査で60社、合わせて105社である。この内2社は両方の調査で訪れているので、実質的には103社となる。この、103社という数は全体の海外神社の数1600余社からいえば、たかだか6％の数にすぎない。しかし、一応、戦前に海外神社が建てられたアジアの主要な地域は全てカバーしているし、また各地域の主要な神社も一応カバーできているので、これらをもとに、一応の分析は可能なことだと考えたのである。

ただし、「海外神社」跡地の問題を、人間の活動の痕跡＝非文字資料として、とりわけ、それを景観や環境の問題として読み解く場合、厳密にいえばまず海外神社の社殿部分だけではなく、森林や山、公園部分を含む境内全体がどのようになっているのかということが押さえられなければならないし、さらにはそれらと、それが存在する（した）町や村、都市との関係性が押さえられなければならない。しかしこの点について意識されたのは先に述べたように、2004年度の旧朝鮮、2005年度の旧満洲の調査というCOE活動の後半からであった。COEの前半部分では少なくとも境内地全体を視野にいれるという点は意識されていたが、COE活動以前の中島の個人研究の段階では一部を除いて、ほぼ社殿部分に限られたものであった。したがって、本稿は「〈海外神社〉跡地に見る景観の変容とその要因」となっているが、厳密に言えば「〈海外神社〉社殿跡地に見る……」という性格が強いものであることを、最初にお断りしておきたい。

Ⅰ　「海外神社」跡地における神社の遺構・遺物の残存状況

1945年の日本の敗戦、植民地支配の崩壊から、今日まで60年余の年月が過ぎ去っている。中島が調査を始めた1990年段階でもすでに40数年の月日が流れていた。それまで、一般に、海外神社は敗戦時、日本の植民地支配の精神的シンボルとして、現地人の放火、略奪、破壊の対象になったと言われていたので、[10] 実際に跡地調査を始める前までは、その痕跡さえ残っていないのではと思っていた。しかしながら、この十数年の調査で、まず感じさせられたことは、意外に神社跡地の痕跡が残っているということであった。まず、この点について触れておこう。

今、それらの「海外神社」跡地の現況、遺構・遺物の残存状況などを表に示すと表1のようになる。[11] この表でも明らかなように、今日その跡地がどのように利用されているのか、いないのかにかかわらず、その痕跡を確認することが出来ないのは37社、約36％に過ぎない。この中にはその神社跡地の付近に行きながらも、最終的にその場所を確定できなかったり、また確定しても十分な調査が出来なかったものも含まれているので（表1の「残存状況」の「不明」10社がこれである）実際はもっと少ない数字になってくると考えている。

石やコンクリートで造られた、鳥居や燈籠、ある

写真1　旧樺太泊居支庁下、泊居町に建てられた泊居神社跡地。手前、一の鳥居の右手に、戦勝記念碑が見える。

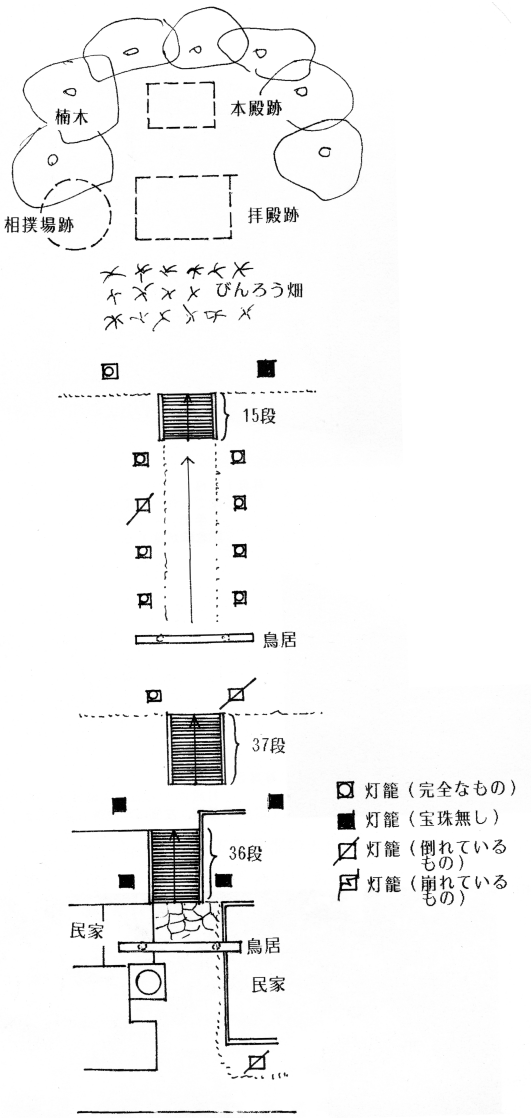


図1　旧台湾玉里社跡現況図（おおよその配置を示したもの。中島「台湾の神社跡を訪ねて」、『歴史と民俗』10号、1993年8月、91頁）

いは手水鉢、また、境内に建てられた様々な記念碑、さらには階段や基壇部分といったものが数多く残されている。例えば、写真1は旧樺太の西海岸、泊居支庁の泊居町に建てられた、泊居神社（1919年創

写真2　旧台湾花蓮港庁下、玉里街に建てられた玉里社跡地。二の鳥居と燈籠。

写真3　旧台湾新竹州下、桃園街に建てられた桃園神社跡地。現在桃園縣忠烈祠に改変されているが、一部改変されながらも多くの旧神社施設が残っている。

立）の跡地である。[12] 泊居の街から一望でき、また、泊居の街や日本海を見渡すことの出来る、絶好のロケーションに建てられた神社であるが、今日、2基の鳥居が立っており、社殿の基壇部分や手前の鳥居の側には記念碑（日露戦争勝利記念）が半分土台の土砂が流されながらもかろうじて立っている。また、社殿の右側には忠魂碑（陸軍大臣小磯国昭謹書）も残っているし、さらに、燈籠の台石も4つ（2対）残っている。戦前の神社境内の主な構築物の残骸を全て見ることができる。[13]

また、旧台湾の東部、旧花蓮港庁下玉里郡の玉里社（1928年鎮座）もよく残っている。玉里の街を見下ろす山裾の小高い丘に建てられたものである。写真2は玉里社の第2階段を上りきった、第2ステップに立つ二の鳥居と燈籠であるが、概念図（図1）に見られる如く、全部で、鳥居が2基、それに燈籠17基（内完全なものは9基）がずらりと並んで立っており、それは見事な景観であった。[14]

上記二つの例は、いずれも社殿部分は見ることが出来ないのであるが、社殿部分を含めて、神社の遺

表1　「海外神社」跡地現況表

	旧支配地名	神社名	鎮座地	社格	創立年	本殿面積	境内面積	現況	神社遺構・遺物の残存状況	調査年月
1	台湾	台湾神宮	台北州台北市大宮町	官大	1900	31.60	115,600	ホテル（圓山大飯店）	なし	1992.09
2		台湾護国神社	同州台北市大直		1940			（台湾）忠烈祠	なし	1992.09
3		高雄神社	高雄州高雄市壽町	県	1912T		7,402	高雄縣忠烈祠・公園	階段、燈籠など一部改変されて残存	1992.09
4		台南神社	台南州台南市南門町	官中	1920	8.80	7,316	大駐車場建設中	（不明）	1992.09
5		開山神社	同州台南市開山町	県	1896		1,006	明延平郡王祠として復活	（不明）	1992.09
6		桃園神社	新竹州桃園街	無	1938	5.50	55,800	桃園縣忠烈祠	木造の社殿部分を含めてほぼ完全な形で残存	1996.08
7		花蓮港神社	花蓮港庁花蓮港街	県	1916		19,577	花蓮縣忠烈祠	石段など構造はほぼそのまま	1992.09
8		吉野神社	同庁花蓮郡吉野庄字宮前	無	1912			旧郡長宅・兵舎	境内の区画はそのまま	1992.09
9		豊田神社	同庁花蓮郡壽庄豊田村字森本	無	1915	6.00		碧蓮寺	鳥居1基、燈籠4基、狛犬2体	1992.09
10		林田神社	同庁鳳林郡鳳林庄林田村	無	1915	3.50	6,008	雑木林（檳榔他）	燈籠基壇又は狛犬台座、石造小太鼓橋、石柱	1992.09
11		佐久間神社	同庁花蓮郡蕃地タビト社	無	1923		6,220	文天祥の銅像・歌碑	石段など構造はほぼそのまま	1992.09
12		玉里社	同庁玉里郡玉里街玉里	社	1928T			社殿部分は檳榔畑	石段など構造はほぼそのまま。鳥居2基、燈籠17基	1992.09
13		高砂社	同庁花蓮港街平野帰化	社	1931T			住宅密集地	（不明）	1996.08
14		瑞穂祠	同庁鳳林郡瑞穂庄瑞穂村	社	1931T			畑（蜜柑、文旦）	石段の一部、燈籠の笠の部分（？）	1992.09
15		観音山社	同庁玉里郡玉里街観音山	社	1931T			小祠（福徳祠）	本殿跡のコンクリート石組みあり	1992.09
16		織羅社	同庁玉里郡玉里街織羅	社	1931T			廟建設中	なし	1992.09
17		拔子社	同庁鳳林郡瑞穂庄拔子	社	1933T			個人の墓地	階段、燈籠4基、鳥居の柱跡4つ	1992.09
18		壽社	同庁花蓮郡壽庄壽	社	1933T			公園（中山公園）	石段など構造はほぼそのまま	1992.09
19		タガハン祠	同庁鳳林郡蕃地タガハン社	社	1935T			雑草、檳榔畑	鳥居柱穴2、燈籠3基（2基は基壇のみ）、太鼓橋、階段	1996.08
20		太平祠	同庁玉里郡タビラ社	社	1935T			雑木林	一部階段跡	1992.09
21		銅門祠	同庁鳳林郡蕃地ムクムゲ社	社	1936T			山崩れ跡（砂防堤）	忠魂碑	1992.09
22		大港口祠	同庁鳳林郡新社庄大港口	社	1937T			雑草	鳥居1基、燈籠6基、手水鉢（？）	1992.09
23		新城社	同庁花蓮郡研海庄新城	社	1937T			キリスト教会（天主教会）	鳥居2基、燈籠8基、狛犬4体、本殿跡にマリア像が立つ	1992.09
24		太巴塱祠	同庁鳳林郡太巴塱	社	1937T			廟（協天宮）	なし	1992.09
25		カウワン祠	同庁花蓮郡カウワン社	社	1938T			雑草	鳥居1基、石段など	1992.09
26		馬太鞍遙拝所	同庁鳳林郡馬太鞍	遙				キリスト教会（光復教会）	なし（参道部分だけそのまま）	1996.08
27		チヤカン遙拝所	同庁鳳林郡蕃地平林社	遙				雑草	石段跡、本殿の基壇石組み	1992.09
28	樺太	樺太神社	豊栄支庁豊原市豊原町旭ヶ丘	官大	1910	13.28	21,716	会社事務所・公園（勝利公園）	宝物殿（コンクリート製）、燈籠基壇2、倒壊した燈籠	2003.10
29		樺太護国神社	同庁豊原市大字南豊原		1935		6,000	市立病院	階段、社殿基壇、燈籠基壇（？）、燈籠の笠	2003.10
30		豊原神社	同庁豊原町大字豊原	県	1910	5.41	5,118	検死所	鳥居台石、燈籠基壇（？）	2003.10
31		北辰神社	同庁豊原町大字北豊原	無	1924	1.50	1,226	駐車場,団地	なし	2003.10
32		大山祇神社	同庁豊原郡川上村大字三井	無	1921	3.00	980	畑地	鳥居の片足、鳥居の他の部分の残骸	2003.10
33		泊居神社	泊居支庁泊居郡泊居町大字泊居	無	1921	9.00	2,921	雑草	社殿基壇、鳥居2基、燈籠基壇2対、忠魂碑、戦勝記念碑	2003.10
34		追手神社	同庁泊居郡泊居町大字追手	無	1931	2.15	1,000	雑草	燈籠基壇（？）	2003.10
35		真岡神社	真岡支庁真岡郡真岡町大字真岡	県	1910	23.75	2,559	サハリン郵船会社	階段、下部石積擁壁、燈籠基壇、手水鉢	2003.10
36		蘭泊神社	同庁真岡郡蘭泊村大字蘭泊	無	1922	1.50	1,000	雑草	鳥居台石2、狛犬台座（？）	2003.10
37		野田神社	同庁野田郡野田町大字野田	無	1923	2.15	1,440	雑草	大燈籠基壇2	2003.10
38		稲荷神社	同庁野田郡野田町					牧草地	燈籠基壇（？）	2003.10
39		亜庭神社	大泊支庁大泊郡大泊町大字大泊	県	1914	3.19	3,000	船舶カレッジ	階段、手水鉢、鳥居台石（？）	2003.10
40	南洋群島	八幡神社	サイパン支庁サイパン島東村	無	1924	3.00	1,500	彩帆八幡神社として再建	鳥居、手水鉢、階段、社号標、燈籠2基	2004.08
41		南興神社	同庁サイパン島チャランカ	無	1937		1,053	キリスト教会墓地	鳥居、本殿基壇、燈籠2基	2004.08
42		南陽神社	同庁サイパン島南村アスリート	無	1936		1,860	公園	なし	2004.08
43		彩帆神社	同庁サイパン島ガラバン町香取山	無	1914		6,427	彩帆香取神社として再建	崩れた社号標、燈籠、本殿基壇、階段	2004.08
44		カラベラ神社	同庁サイパン島北村カラベラ	無	1919		6,000	密林	社殿基壇2、階段2、燈籠基壇5対、太鼓橋、手水鉢、鳥居台石	2004.08
45		泉神社	同庁サイパン島泉村		1940			密林	鳥居、燈籠基壇2、石段、本殿基壇	2004.08
46		（南洋コーヒー）神社	同庁サイパン島					草地・雑木林	燈籠、燈籠基壇、鳥居（倒壊）、階段	2004.08
47		天仁安神社	同庁テニアン島ソンソン市街	無	1934	9.00	6,219	学校敷地	鳥居柱の一部（？）	2004.08
48		住吉神社	同庁テニアン島ソンソン	無	1939		1,500	天仁央神社として再建	鳥居、燈籠1対、本殿基壇、玉垣、手水鉢、狛犬1対、階段	2004.08
49		和泉神社	同庁テニアン島マルボ市街	無	1939		3,325	キリスト教祠	本殿基壇、玉垣	2004.08
50		橘神社	同庁テニアン島カーヒー	無	1939		1,816	社殿部分密林	本殿基壇、玉垣、燈籠基壇1対、鳥居（倒壊）、手水鉢	2004.08
51		日の出神社	同庁テニアン島アンガー	無	1939		2,166	公園	鳥居（片足）、燈籠4基、基壇、鳥居柱（1本横転）	2004.08
52		NKK神社	同庁テニアン島					草地	鳥居2基、燈籠3対、本殿基壇、玉垣	2004.08
53		羅宗神社	同庁テニアン島チューロ	無	1939		3,624	草地	社号標、階段、本殿基壇、玉垣、燈籠基壇1対、大灯籠基壇1対	2004.08
54		南光神社	同庁ロタ島ルギー	無	1939		3,897	密林	（不明）	2004.08

55		ロタ神社	サイパン支庁ロタ島ソンソン	無	1939		4,500	キリスト教祠	階段、本殿基壇、拝殿基壇	2004.08
56		大山祇神社	同庁ロタ島サバナマニラ高地	無			700	記念碑	本殿基壇	2004.08
57		南洋神社	パラオ支庁パラオ島コロル町アルミス高地	官大	1940		96,248	個人宅・南洋神社として再建	階段2、社殿基壇、燈籠3対、手水舎、社号標、太鼓橋等	2004.08
58		ガラスマオ神社	同庁バベルダオブ島ガラスマオ村					草地	社殿基壇2、手水鉢（？）、鳥居台石2、階段	2004.08
59		ペリリュウ神社	同庁パラオ諸島ペリリュウ島	無			518	ペリリュー神社として再建	なし	2004.08
60	満洲	建国神廟	新京特別市帝宮内		1940			文化財	社殿基壇、鳥居跡	2006.08
61		建国忠霊廟	新京特別市		1940			ほぼそのまま現存	本殿、拝殿、回廊、神門等そのまま現存、燈籠2基	2006.08
62		新京神社	新京特別市敷島区平安町	神	1915	18.25	6,156	幼稚園	拝殿、一部改造された幣殿、鳥居	2006.08
63		吉林神社	吉林省吉林市三緯路	神	1934		6,403	児童公園	なし	2002.08
64		公主嶺神社	同省公主嶺街花園町	神	1909	83.00	746	駅前ビル	なし	2006.08
65		間島神社	間島省龍井街第一区		1925		25,268	学校敷地	なし	2002.08
66		奉天神社	奉天省奉天市大和区琴平町	神	1915	13.85	9,546	体育館、八・一劇場、公園	なし	2006.08
67		撫順神社	同省撫順附属地永安台西公園内	神	1909	10.10	6,258	クラブハウス（公安局退職者用）	燈籠基壇1対、石造鳥居の一部、コンクリート製鳥居の一部	2006.08
68		鉄嶺神社	同省鉄嶺街花園町二丁目	神	1915	3.00	300	公園（鉄嶺公園）	なし	2006.08
69		開原神社	四平省（旧奉天省）開原神明街	神	1915	3.60	3,110	市役所	なし	2006.08
70		四平街神社	同省四平街西区利幸町一丁目	神	1918	3.00	10,324	軍関係施設	（不明）	2006.08
71		西安神社	同省西安縣第一区仙城村		1935		660	遼源鉱務局再就職斡旋所	一部改造された拝殿、手水鉢、燈籠基壇	2006.08
72	関東州	関東神宮	旅順市	官大	1938			海軍施設	（不明）	2004.03
73		大連神社	大連市南山２ノ２	神	1909	7.00		学校敷地	石段の一部	2004.03
74		沙河口神社	大連市霞町191番地	神	1914	16.85		病院	鳥居台石（？）	2004.03
75		柳樹屯稲荷神社	大連湾會王家屯267番地	神	1919	4.78		個人宅	（不明）	2004.03
76		小野田神社	大連市泡崖屯1081番地	神	1922	0.69		学校敷地	（不明）	2004.03
77		金州神社	金州會新金州216及213番地	神	1934	7.50		荒地	（不明）	2004.03
78	中華民国	北京神社	北京特別市布貢院東大街		1940		6,000	社会科学院	（不明）	2000.09
79		天津神社	天津市福島街18		1915		1,066	八・一礼堂	なし	2000.09
80		青島神社	青島遠寧路8		1919		6,412	電子台・公園（文化活動広場）	階段、鳥居台石2、玉垣の一部	2003.03
81		台東鎮神社	青島台東一路35		1915		2,637	商店街	（不明）	2003.03
82		上海神社	上海江灣路118		1933		1,089	陸軍施設	なし	1990.11
83	朝鮮	朝鮮神宮	京城府南山	官大	1919	17.00	100,000	植物園（温室）、公園（南山公園）	なし	2001.09
84		龍頭山神社	釜山府弁天町	国小	1917	12.20	2,157	公園（龍頭山公園）	なし	2001.09
85		光州神社	光州府亀岡町	国小	1917		18,758	公園（光州公園）	石段	2005.08
86		順天神社	全羅南道順天郡順天邑	邑供	1937		3,549	順天聖信園（児童福祉施設）	神主の住宅	2005.08
87		羅州神社	同道羅州郡羅州邑	邑供	1937		2,543	公園（南山市民公園）	なし	2005.08
88		松島神社	木浦府松島町	府供	1916		4,975	住宅密集地	階段、社務所、納屋、鳥居跡	2005.08
89		小鹿島神社	全羅南道高興郡錦山面		1936		1,380	全羅南道指定文化財	コンクリート製本殿・拝殿・祭器庫の骨格、社務所	2005.08
90		和順面神明神祠	同道和順郡和順面郷廳里	神祠	1930			公園、弓道練習場（端陽亭）	石段	2005.08
91		梨陽面神明神祠	同道和順郡梨陽面梨陽里	神祠	1939			山林	なし	2005.08
92		同福面神明神祠	同道和順郡同福面漆井里	神祠	1939			公園	なし	2005.08
93		綾州面神明神祠	同道和順郡綾州面蠶亭里	神祠	1939			原野	なし	2005.08
94		東面神明神祠	同道和順郡東面壮東里	神祠	1939			墓地	なし	2005.08
95		南面神明神祠	同道和順郡南面沙坪里	神祠	1940			墓地	なし	2005.08
96		清豊面神明神祠	同道和順郡清豊面東里山	神祠	1940			山林、広場は水田	なし	2005.08
97		春陽面神明神祠	同道和順郡春陽面石亭里	神祠	1940			公園	なし	2005.08
98		道岩面神明神祠	同道和順郡道岩面源泉里	神祠	1940			山林、広場は唐辛子畑	なし	2005.08
99		寒泉面神明神祠	同道和順郡寒泉面金田里	神祠	1940			山林、旧墓地	8段の階段、基壇の一部	2005.08
100		二西面神明神祠	同道和順郡二西面野沙里	神祠	1940			山林、広場は桑畑	基壇	2005.08
101		道谷面神祠	同道和順郡道谷面孝山里	神祠	1941			原野	なし	2005.08
102		北面神祠	同道和順郡北面	神祠	1941			山林（杉林）	基壇、切石の基礎	2005.08
103	昭南島	昭南神社	昭南島（シンガポール）マクリッチ貯水池		1943			ゴルフ場、本殿部分は密林	太鼓橋支柱、手水鉢、本殿基壇、社殿基壇	1993.08

1　「神社名」、「鎮座地」、「社格」、「創立年」、「本殿面積」、「境内面積」は、佐藤弘毅の「戦前の海外神社一覧Ⅰ―樺太・千島・台湾・南洋―」（『神社本庁教学研究所紀要』第2号、1997年3月）及び「戦前の海外神社一覧Ⅱ―朝鮮・関東州・満州国・中華民国―」（『同』第3号、1998年2月）によった。なお、「本殿面積」・「境内面積」の単位は「坪」である。

2　「社格」の中で「官大」とは官幣大社、「国小」とは国幣小社、「県」とは県社、「無」とは無格社をそれぞれ指す。また社格ではないが、「神」は神饌幣帛指定神社、「府供」は府供進社、「邑供」とは邑供進社、さらに「社」とは台湾において、「神祠」とは朝鮮において、簡便な神社として 建てられたもの、「遙」とは遙拝所を指す。また「創立年」で「T」とあるのは「鎮座年」を表す。

3　番号38、45、46、52、58、60、61、103の8つの神社は上記、佐藤の一覧には載っていないものである。

4　番号46の神社の正式名称は不明。倒壊した鳥居の柱に「南洋コーヒー株式会社」と刻まれているので、仮に（南洋コーヒー）神社と表記する。なお、注（11）参照。

5　「調査年月」は複数回行った場合は最新の年月を入れている。

写真4　同前。木造の本殿、拝殿がそのまま残る。

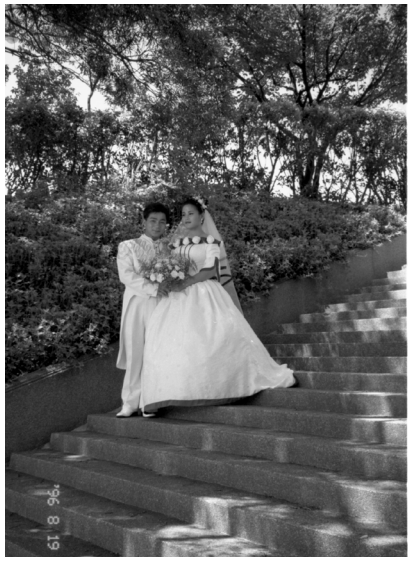


写真5　同前。旧神社時代の石段上で、結婚の記念写真を撮る台湾人のカップル。

構が残っているものもある。一つは、旧台湾の北部、新竹州桃園郡の桃園街（現桃園国際空港のある所）に建てられた桃園神社（1938年設立）である。この神社は現在桃園縣の忠烈祠[15]に改変されているが、燈籠や鳥居、階段、手水鉢など石造建築物が残っているだけでなく、手水舎、社務所、中門、祝詞舎、拝殿、本殿などの木造建築物がほぼそのまま残っている（写真3）。ここでは、本殿の中の神々が入れ替わっているだけであり、これだけ海外神社の面影をほぼそのまま残しているのは、調査した103社の中では、ここだけである。後で見るように、旧台湾の主要な神社は多く忠烈祠に改変されるわけであるが、今日、木造建築物は多く多彩式の中国風の社殿に建て替えられている。ただ、この桃園縣忠烈祠だけは、日本時代の神社の社殿をそのまま利用していることもあって（写真4）、他の忠烈祠にはない独特の雰囲気を醸しだしている。

筆者が調査に訪れた日、ちょうど若いカップルが写真屋とともに、この忠烈祠を背景に結婚の記念写真を撮りに来ていた（写真5）。また、写真6は1993年に日本の神職達が訪れ、正装して参拝している様子である（大場俊賢氏提供）。

この他に、木造ではないが建築物が残っているのは、旧満洲国の新京（現長春）に建てられた、建国忠霊廟である。[16] 建国忠霊廟は1940年、建国神廟とともに建てられた。天照大神を祀る建国神廟が日本の宮中三殿の一つ賢所になぞらえたものとすれば、建国忠霊廟は靖国神社になぞらえて造られたものである。今日、神門、回廊、拝殿、本殿部分等がそのまま残っており（写真7）、旧参道の燈籠も残っている。今日その中は一部が住居・作業場として利用されているようであるが、同行していただいた長春師範大学の方の説明によると、現在、歴史的文物として保存される計画があるとのことであった。[17]

また、同じく旧満洲の新京（現長春）の新京（旧長春）神社（1915年創立）は、現在幼稚園（長春人民政府機関第二幼稚園）として利用されているが、鳥居がその門として利用されており（写真8）、また拝殿、幣殿（切妻造平入り）が一部改造されながら残っていて（写真9）、園舎として利用されている。[18] さらに旧朝鮮全羅南道高興郡小鹿島に建てられた小鹿島神社である。これは1916（大正5）年に朝鮮総督府がハンセン病患者を強制的に隔離するために小鹿島慈恵医院（後小鹿島更生園と改称）を建てたが、翌年その官舎地帯に神祠が建てられたことに始まる。その後、園の拡張工事に伴い、新官舎地帯に新たな神社を創り、1936年に創立許可が下りたものである。現在、階段の他に木造の社務所、それにコンクリート造りの祭器庫、拝殿、本殿が残って

写真6　同前。旧本殿前で拝礼する日本の神職たち（1987年、大場俊賢氏提供）。

写真7　旧満洲国新京に建てられた満洲国建国神廟。巨大な社殿がほぼそのまま残っている。

写真8　旧満洲国新京に建てられた新京（長春）神社の鳥居。幼稚園の門となっている。

写真9　同前。旧新京神社拝殿南面。棟の高い旧拝殿の妻面に接続する白壁の棟の低い建物は後補であろう。

写真10　旧朝鮮全羅南道高興郡小鹿島に建てられた小鹿島神社。拝殿および拝殿前階段。

写真11　同前。本殿正面。屋根はスレート葺。

いる。社務所は増改築がなされているようだが、今も居住用に使われており、祭器庫、拝殿（写真10）、本殿（写真11）は開口部の建具等がなくなり、内部も壊されているが、骨格は現在も残っている。この小鹿島神社の遺構は、現在の韓国内にある神社遺構の中で最もまとまって当時の面影を偲ぶ事ができる神社遺構であり、2000年に民族屈辱の歴史建造物として全羅南道指定文化財登録第71号に指定されている。[19] この他、旧満洲の四平省（旧奉天省）西安（現遼源）に西安鉱業所によって建てられた西安神社（1935年設立）も鳥居は残っていないが社殿部分が残り（写真12）、他に手水鉢（写真13）や燈籠の土台が残っている。[20] また、旧朝鮮全羅南道の木浦は、日清戦後に開港場の一つとして選定されて以

写真12　旧満洲国西安（現遼源）に建てられた西安神社。もと入母屋造の拝殿が切妻造に改変されている。両脇に突き出た部分は後補。

写真13　同前。残存する手水鉢。

降、1930年代半ば頃まで全羅南道における最大の都市として発展し、日本人居住者の最も多い地であった。この地の松島町に1916年に建てられた松島神社跡地には、社務所や納屋が残っていて、個人の利用に供されており、また階段や鳥居跡も残っている。この他、同じく、旧朝鮮全羅南道順天郡順天邑に1937年に建てられた順天神社は今日キリスト教系の児童福祉施設（順天聖信園）となっているが、ここでは社務所だけが改造されて残っている。

以上、社殿部分や神社の遺構が比較的まとまって残っている例を紹介したが、もちろんこうした例は少ない。しかし表1のごとく、多くの神社跡には階段や燈籠や鳥居や手水鉢、あるいは基壇等が単体で、あるいはいくつかの組合わせで残っており、神社跡地であることを確定できるのである。

この他にも神社境内にあった遺物が、跡地ではなく、場所を移動して残されている場合もある。サハリンの郷土史博物館の玄関前の両側に飾られている狛犬（獅子）像はかつて樺太護国神社（後述）に奉安されていたものである。また現在台北の台湾省立博物館の前庭に置かれている水牛の像は、台湾護国神社の境内にあったものを移したものであるという。このように、重量があり、また美術品としての価値のあるものは、公的施設に移されて公開されているが、簡単に移動できるものは、戦後の混乱期に、またその後の長い年月の間に、社殿跡から移動されたものも多いようである。旧南洋群島のペリリュウ神社跡地を訪れた時には、旧社殿跡にあった1基の燈籠を自分の家に持ち帰ったという話を現地人に聞いたし、また台湾の拔子社の木の鳥居は橋の部材として利用したという話も聞いた。さらには台湾の台南嘉義に建てられた、関子嶺神社の石造社号標が階段の踏み石として、また同神社の賽銭箱が学校のごみ箱として、利用されたという話も聞いた。[21]

Ⅱ　「海外神社」跡地の景観変容の四類型

さて、いよいよ本題に入ろう。表2はこれまで現地を訪れた103社の「海外神社」跡地が今日どのような状況になっているのか、どのように景観を変容させているかということを、現況・景観別にまとめたものである。

「海外神社」跡地の現況の景観は大きく4つに分ける事が出来る。1つは、そのまま未利用のまま放置され草地や荒地の中に神社の遺構が残されていたり、また、雑木林や密林（ジャングル）の中に遺構が残されている例である（以下、「放置」と表記）。2つめは、神社跡地が今日何らかの形に改変、手を加えられて、その中に神社の遺構の一部が残っていたり、あるいは全く痕跡さえ見られないという例である（以下、「改変」と表記）。3つめは、戦前の海外神社が、戦後いったん廃絶し、その機能を喪失したにもかかわらず、1980年代以降、「再建」されたものである（以下、「再建」と表記）。4つめは、海外神社が、もともとあったある施設を利用・改変し

表2　現況別旧「海外神社」一覧

類型	現況	旧神社名
改変	公園	高雄神社・壽社・新城社（台）、樺太神社（樺）、朝鮮神宮・龍頭山神社・光州神社・羅州神社・和順面神明神祠・同福面神明神祠・春陽面神明神祠（朝）、青島神社（中）、南陽神社・日の出神社・大山祇神社（南）、吉林神社・鉄嶺神社・奉天神社（満）
	宗教施設	新城社・馬太鞍遙拝所（台・教会）、和泉神社・ロタ神社（南・キリスト教祠）、豊田神社（台・寺院）、観音山社・太巴塱祠・織羅社（台・廟、小祠）
	墓地	拔子社（台）、東面神明神祠・南面神明神祠（朝）、南興神社（南）
	忠烈祠	台湾護国神社・高雄神社・花蓮港神社・桃園神社（台）
	銅像・記念碑・記念館等	佐久間神社・壽社（台）、大山祇神社（南）、朝鮮神宮・龍頭山神社・光州神社・春陽面神明神祠（朝）、樺太神社（樺）
	文化財等	小鹿島神社（朝）、建国神廟（満）
	幼稚園・学校等教育施設	大連神社・小野田神社（関）、亜庭神社（樺）、新京神社・間島神社（満）、天仁安神社（南）、順天神社（朝）、北京神社（中）
	病院	樺太護国神社（樺）、沙河口神社（関）
	軍施設	吉野神社（台）、関東神宮（関）、天津神社・上海神社（中）、四平街神社・奉天神社（満）
	その他	台湾神宮（台・ホテル）、高砂社（台・住宅地）、樺太神社（樺・会社事務所）、豊原神社（樺・検死所）、真岡神社（樺・会社）、北辰神社（樺・駐車場、団地）、柳樹屯稲荷神社（関・個人宅）、朝鮮神宮（朝・植物園<温室>）、松島神社（朝・住宅地）、南洋神社（南・個人宅）、ペリリュウ神社（南・採石場）、青島神社（中・電子台）、台東鎮神社（中・商店街）、昭南神社（昭・ゴルフ場）、公主嶺神社（満・駅前ビル）、奉天神社（満・体育館）、撫順神社（満・公安局退職者用クラブハウス）、開原神社（満・市役所）、西安神社（満・遼源鉱務局再就職斡旋所）
	農耕地・牧草地・山林	瑞穂祠・玉里社（台）、大山祇神社・稲荷神社（樺）、清豊面神明神祠・道岩面神明神祠・二西面神明神祠・北面神祠（朝）
放置	草地・荒地・雑木林・密林	林田神社・太平祠・銅門祠・大港口祠・カウワン祠・タガハン祠・チヤカン遙拝所（台）、泊居神社・追手神社・蘭泊神社・野田神社（樺）、梨陽面神明神祠・綾州面神明神祠・清豊面神明神祠・道岩面神明神祠・寒泉面神明神祠・二西面神明神祠・道谷面神祠・北面神祠（朝）、金州神社（関）、カラベラ神社・泉神社・（南洋コーヒー）神社・橘神社・NKK神社・羅宗神社・南光神社・ガラスマオ神社（南）、昭南神社（昭）
	ほぼ旧状を維持したまま	建国忠霊廟（満）
再建		彩帆神社（南・彩帆香取神社として再建）、八幡神社（南・彩帆八幡神社として再建）、住吉神社（南・天仁央神社として再建）・ペリリュウ神社（南・旧跡地の近くに再建）、南洋神社（南・私邸内の社殿部分再建）
復活		開山神社（台・明延平郡王祠）、和順面神明神祠（朝・弓道場）

※旧神社名の後の（ ）は、戦前、日本の支配下に入った地域の旧名（表1の「旧支配地名」）の頭文字である。

て創立された場合、日本の敗戦により、それが元の施設に戻った例、いわば「復活」した例である（以下「復活」と表記）。

表2はこの4つの区分に従って、該当する神社名を入れたものである。ただし旧官国幣社のように多くの社殿と広大な境内をもっている場合、神社跡地といっても、本殿部分と他の社殿部分、またそれらと境内が別々に利用されて、景観を変容させている場合がある。例えば朝鮮神宮（旧京城府南山、1919年創立、官幣大社）の場合、広大な境内は今日南山公園として利用されており、本殿部分は植物園（温室）として利用され、また他の社殿部分には安重根の記念館もある。また、昭南神社（旧昭南島＝シンガポール、1943年創立）の場合、本殿部分はジャングルの中に埋没しているが、その他の社殿、境内部分はゴルフ場となっている。このような場合には、1つの神社跡地が、異なった現況・景観の中にそれぞれ記入されているので、この表の神社名の合計は103社を超えている。

さて、これまで調査した103社の神社跡地の内、一番多いのは、跡地が何らかの形で改変され、手を加えられて利用されている「改変」の事例である。先程述べた、神社名の重複を避けるために、今仮に、現況を本殿跡地部分に固定して、その現況の数を数

写真14　台湾。植民地下、開山神社に改変されたが、「復活」した明延平郡王祠。

写真15　旧朝鮮全羅南道和順郡和順面神明神祠跡地。正面小高く盛り上がっている所に神祠があった。現在は弓道場になっている。

えてみれば67社と全体の65％を占める。2番目に多いのは「放置」されている例で、28％、約3割である。「再建」された例は5社、神社となる前のものに「復活」した例は2社だけである。

さて、これらをもう少し具体的に見ておこう。まず、数が少ない方から見ていきたい。

(1)「復活」した例

「復活」した例としては、まず旧台湾の開山神社がある。台南州台南市にあった開山神社は、日本の台湾統治が始まった翌年、1896年に創立（翌年県社に列格）されたもので、台湾で最も早く創立された海外神社である。しかし、創立といっても、この神社は新しく建てられたものではなく、17世紀の半ばオランダ人支配から台湾を解放し、また明朝再興を掲げて清軍と戦い、それ故に台湾の漢民族から崇拝を集めていた鄭成功を祀っていた小祠（開山王廟あるいは開台聖廟と呼ばれていた）を、開山神社と改称、改変したものである。祭神は同じく鄭成功とされていたが、これは鄭成功の母親が日本人であったため、開山神社の創立は、日本の台湾支配を正当化する意味合いを持っていた[22]。

今日は、元に戻り、明延平郡王祠として鄭成功を祀る廟となっているが（写真14）、日本の統治の開始による、従来の廟から開山神社への改変、さらには日本統治の終了による、今日の明延平郡王祠への改変の具体相は興味ある課題であるが、この点は後日を期したい。

また、祭祀施設ではないが、神社が建てられる前の施設に戻った例として、旧朝鮮全羅南道和順郡の和順面神明神祠がある。この神祠は和順郡の13の神祠の中でも最も早い、1930（昭和5）年7月に設立許可がおりたものだが、郡庁舎が所在する和順郡の中心的な面の小高い山上に建てられた。神殿そのものはそう大きなものではなかったが、和順郡内の他の神祠とは異なり、今日も残る長い立派な石段を持つなど、むしろ神祠というよりも神社の様相を強く持ったものであった。ここは、もと、伝統的な弓道の練習場（端陽亭）があったところであり、ここに神殿を建てたのであるが、日本の敗戦と共にこの神殿は大韓青年団の手によって破却され、1968年にもとの弓道場に復活して今日に至っている[23]（写真15）。

(2)「再建」された例

次に、「再建」された神社について見ていこう。旧南洋群島に建てられた神社の中で、「再建」された神社が5つある[24]。1つはテニアン島の天仁央（安）神社であり、2つめはサイパン島の彩帆香取神社であり、3つめは同島の彩帆八幡神社（以上の3つは現北マリアナ諸島連邦）、4つめがコロール島の南洋神社であり、5つめはペリリュウ島に建てられたペリリュウ神社である（以上の2つは、現パラオ共和国）[25]。

1つめの、天仁央神社はテニアン島にあった元住吉神社が1984年に天仁央（テニアン）神社として、

写真16　旧南洋群島テニアン島の住吉神社跡地に再建されたテニアン（天仁央）神社。階段や鳥居は住吉神社時代のもの。

写真17　同前。玉垣、本殿基壇、狛犬は旧住吉神社時代のもの。基壇の上に石造の新しい本殿が置かれている。

写真18　旧南洋群島サイパン島、彩帆神社跡地に再建された彩帆香取神社。拝殿の奥に本殿へと続く彩帆神社時代の階段が見える。

写真19　同前。社前に残置された、旧彩帆神社時代の燈籠と社号碑。

天仁央神社奉賛会により、「再建」されたものである。

日本統治下にあっては、テニアン島には6つの神社があり、その中の一つとして、市街のソンソンに島の中心的神社として、島全域を氏子区域とする、天仁安神社というものが建てられていた（1934年創立）。しかし、これは1944年のアメリカ軍の爆撃、占領によって壊滅的な打撃を受け消滅してしまった（跡地には、学校が建てられている）。

また、住吉神社は1939年にソンソンのライオンロックと呼ばれる高台中腹の眺めの良い場所に南洋興発株式会社の第1農場を氏子区域とする神社として創立されたものであった。

この住吉神社跡地に1984年に天仁央神社奉賛会によって、天仁央神社が再建されたのである。写真16は入り口部分であるが、左側に英文で「TENIAN SHRINE」と書かれた看板の後方に「天仁央神社」と書かれた社号標があり、燈籠、鳥居、さらには手水鉢も見える。奥に白い社殿が見えている。鳥居や手水鉢、階段は旧住吉神社の遺構・遺物である。本殿や、手前の狛犬（青流社奉納）が再建にあたって新しく据えられたものであり、社殿を囲む柵（玉垣）や本殿の基壇は元の住吉神社時代のものである（写真17）。

2つめの、彩帆香取神社は、旧南洋群島の神社の中で、最も早く建てられた彩帆神社（1914年サイパン島のガラパン町香取山に創立、氏子区域ガラパン町一円）が再建されたものである。彩帆神社は1944年のアメリカ軍との戦闘で炎上、焼失したが、それを1985年にサイパン（彩帆）香取神社として再建したものである（写真18）。

境内の「再建の記」には以下のように書かれている。「北マリアナ連邦の繁栄と平和、並びに日本国との悠久の親善友好を祈念しつつ……連邦政府の歴史事跡を保存尊重する考えと日本の香取神社連合会との合意に依り……神社祭典の斎場を整へ、以て香取大神の宏大なる神徳を仰ぎ太平洋の国々の平和と諸国民の幸福を祈念する次第である。香取神社連合会・マリアナ観光局」

サイパンの中心街、ガラパン地区の旧香取山を背

写真20　旧南洋群島サイパン島、八幡神社跡地に再建された彩帆八幡神社。鳥居の後ろ、巨大な岩に囲まれた奥に社殿がある。

写真21　同前。旧八幡神社時代の鳥居が倒れたまま残されている。

景にした公園の一角、砂糖王といわれた南洋興発株式会社の社長松江春次の巨大な銅像とともにある、再建された彩帆香取神社の鳥居や燈籠、社殿は全部新造されたもので、当時の面影を偲ばせてくれるのは、わずかに鳥居の手前に残されている、崩れた燈籠と社号碑（写真19）、そして拝殿から本殿に続く階段と本殿の基壇だけである。

なお、拝殿の左側に彩帆鎮霊社というものが建てられているが、その拝殿の天井には「彩帆鎮霊社御創建奉仕者名　清流社青年神職・南洋群島慰霊巡拝団（個人名略）昭和六拾年六月吉祥日」とある。

3つめのサイパン島の彩帆八幡神社は、1924年にサイパン島の東村に建てられ、東村一円を氏子区域とする八幡神社を、1981年に埼玉県久伊豆神社の小林茂宮司が中心になって彩帆八幡神社として再建したものである。祭神はもと大抵比賣神と息長帯姫であったが、再建された神社の祭神はサイパン国魂大神、八幡大神、久伊豆大神の三神である。再建の経緯は、サイパンを訪れた宮司の子息が唯一神社の面影を残していた旧八幡神社を見て、再建を決意したことである。旧八幡神社が戦後、長くその面影を留めていたのは、戦後境内地の所有者となった、現地人のフランク・ゲレロ氏が大切に守りつづけてきたからであった。

社殿は巨大な2枚の岩の間に挟まれた空間（参道）の奥に安置され、この岩の入り口に鳥居が立てられている（写真20）。この社殿と鳥居は再建の際、日本で作って運んだものである。この鳥居の先に、前の八幡神社時代の手水鉢と、鳥居が倒れたまま残されており（写真21）、またその前には社号碑、燈籠、参道の階段が草に埋もれて残っている。

4つめの南洋神社は1940年、コロール島アルミス高地に南洋群島の総鎮守として建てられた官幣大社である。[26] 境内地は96,248坪、樺太神社の約5倍、台湾神宮、朝鮮神宮に匹敵する広さであった。敗戦後、1945年9月、米国側の了解のもとに「奉焼式」を行い、本殿などの社殿部分を日本側の手によって「奉焼」した。現在、この南洋神社跡地の中心部分は私有地となっており、旧広場のあたりに個人の邸宅が建っている（写真22）。この邸宅の前庭のような形で、旧本殿・拝殿の基礎石組みの上に、鳥居や燈籠、狛犬や本殿が新しく設置されて、1997年「再建」された（写真23）。本殿右側に再建の趣旨を述べた石碑が立っているが、そこには、次のようなことが書かれている。「日本人がその地に定住するには、先ず土地の国魂を祀り開拓の先輩を敬重し、敬神崇祖のまごころを尽くすことから始まった。その精神の集中するところが神社であった。しかしながら今次大東亜戦争の挫折によって南洋神社も一旦撤収のやむなきに至った。ここに、新たなる時代を迎えて日パ両国の有志により神社の歴史的由縁に基づきこれを再建し祖先と英霊の御加護を祈り南洋の発展と平和の基点とし以って世界文明の進運に寄与せんと願ふものである」。

写真22　旧南洋群島コロール島（パラオ）、南洋神社跡地に再建された南洋神社。手前、本殿・拝殿跡の部分に神社が再建され、向こう側の広場の部分に個人の邸宅が建てられている。新設された石造りの本殿裏から邸宅を臨む。

写真23　同前。旧拝殿・本殿部分の階段状の基壇の上に、鳥居、燈籠、社殿が建てられている。

また、本殿の左側には別の石碑（戦死者顕彰碑）が設置されているが、そこには次のような文が日本語と英語で刻まれている。「この南洋神社には、日本とパラオの祖先神と大東亜戦争の戦死者が刻まれている。ここに、パラオの戦死者の名を刻み、その勇気を讃える。名越二荒之助」。

神社の遺構・遺物については多く残っている。社殿部分の基壇、参道の入り口の大燈籠（1対）、神社境内入り口の大燈籠（1対）、太鼓橋、朽ちた社号標、そして社殿に向かう階段。社殿面にあがる階段。その袂に大燈籠（1対）、手水鉢、手水舎などがある。

5つめは、ペリリュウ島のペリリュウ神社である。ペリリュウ島はパラオ島の南方にある小さな島であるが、アジア太平洋戦争末期、フイリッピン防衛（攻略）のために、日米両軍が73日間にわたって死闘を繰り広げた島であった。

ペリリュウ神社の創建年は不明であるが、ペリリュウ島一円を氏子区域とした神社で、日米両軍の戦闘の中で焼失したのを、1982年5月に元の神社跡地に清流社によって再建されたものである。[27] それをさらに2001年7月に現在の地、すなわち旧社地より少し上がった高台の上に再再建したものである（写真24）。旧社殿跡地は現在採石（ライム・ストーン）場になっている。

社殿の左側に、その旧社地に再建した本殿と鳥居

写真24　旧南洋群島ペリリュウ島（パラオ）に再再建されたペリリュー神社。旧ペリリュウ神社跡地を少し上った高台に新しく再建された。

が移設されている。その他の設備は全て新しく創られたものである。ペリリュー神社と書かれた鳥居の社額は、今日パラオの特産品となっている木彫りの板（ストーリーボード）で作られている。また、本殿の左下には神社の由緒が次のように刻まれている。

「この神社は青年神職等の組織する清流社が昭和五十七年（1982）年五月建立したもので、先に大戦において祖国日本を護るために此の地で散華された、多くの陸海将兵と民間人すべての御霊を祀る鎮魂のところです。祭典は毎年行はれ祖国の安泰と世界の平和を祈念致します。平成十三年七月吉日　清流社」

また、前の社殿跡地時代から建てられていた、米

太平洋艦隊の指揮官ミニッツの次の言葉を両面に日本文と英文で刻んだ石碑も建てられている。

「諸国から訪れる旅人たちよ、この島を守る為に日本軍人がいかに勇敢な愛国心をもって戦いそして玉砕したかを伝えられよ」

以上、5つの「再建」された神社を見てきたが、①いずれも、旧南洋群島に建てられた神社であること、②1980年以降に「再建」されていること、③主体になったのは日本の神社、民族派の関係者であること等がその特徴としてあげる事ができるであろう。とくに、③で目立つのは清流社という団体である。[28] この団体は青年神職等によって組織された民族派の団体で、一般には、いわゆる「新右翼」に括られている団体である。この団体は、5つの「再建」神社の中でペリリュー神社の再建に中心的にかかわり、また、天仁央神社においても、燈籠を奉納し、さらに、彩帆香取神社においても、その境内に鎮霊社を建てている。

(3)「放置」されたままになっている例

次に、今日、「放置」されたままになっている神社跡地について見ていこう。まず「放置」されているといっても、戦後破却を免れ、そのまま形をほぼ維持したまま放置されている場合と、戦後、破却されたりあるいは自然に朽ちたりして、草地やあるいは荒地の中にその痕跡を留めているもの、また雑木林や密林（ジャングル）の中に埋没してしまっている場合がある。前者の例は一例だけで、先に見た旧満洲国の建国忠霊廟がそれである。ここでは、後者の例を若干紹介しておこう。

まず「放置」されたままになっているものの中で、階段、鳥居、燈籠、社殿の基壇などがおおよそ揃っていて、神社の全体像を思い浮かべる事の出来る神社跡地は、旧台湾では大港口祠、タガハン祠、旧樺太では泊居神社、旧南洋群島ではカラベラ神社、泉神社、（南洋コーヒー）神社（以上、サイパン島）、橘神社、NKK(南洋興発株式会社）神社、羅宗神社（以上、テニアン島）、ガラスマオ神社（パラオ、バベルダオブ島）、旧昭南島（シンガポール）の昭南神社などの跡地である。これらの内からいくつか紹介しておこう。

写真25　旧台湾花蓮港庁下、新社庄に建てられた大港口祠跡地。階段、鳥居、燈籠などが放置されたままになっている。

写真25は旧台湾花蓮港庁鳳林郡新社庄に建てられた大港口祠（1937年創立）である。港を望む丘陵地にあり、道路に面してすぐに階段がある。階段を上ったところに鳥居が1基立っており（鳥居の上部、笠木の中央に角状の突起が付けられている）、また写真では判りにくいが階段に沿って2対4基の燈籠が立っており、また階段を上り詰めたところ、鳥居の両側にも1対の燈籠がある。また、手水鉢らしきものもあった。

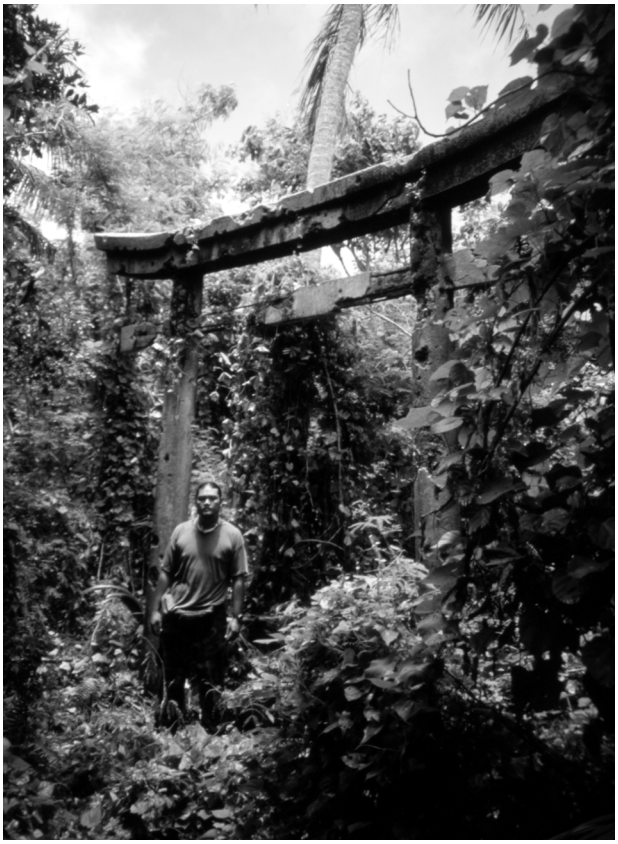
樺太の泊居神社については、先に紹介したので省略する。

南洋群島には、こうした「放置」された神社跡地が多い。まず、サイパン島のカラベラ神社は1919年旧北村に建てられ、北村一円が氏子区域となっていた神社である。山裾の傾斜地を利用して創られたこの神社は、今日すっかり、ジャングルの中に埋もれている。道路から、牧場を横切り、ジャングルの中に分け入っていくと太鼓橋、手水鉢、鳥居台石、

写真26　旧南洋群島サイパン島北村に建てられたカラベラ神社跡地。完全にジャングル化した跡地に放置されたままの本殿基壇部分。これは雑草・雑木を切り払ったあとに撮った写真である。

写真27　旧南洋群島サイパン島泉村に建てられた泉神社跡。完全にジャングル化した跡地に放置された鳥居。

写真28　旧南洋群島テニアン島チューロに南洋興発株式会社の直営農場の総鎮守として建てられた羅宗神社跡地。社号標が放置されたまま残っている。



階段、その脇に点点と残る燈籠の台石（5対、10基）、それを上りきったところに基壇が2つ（拝殿と本殿か）斜めの線で少し離れて残っている（写真26）。サイパン島の神社は彩帆神社が6427坪と最大で、カラベラ神社を除く神社はいずれも1千坪台の境内地であるが、この神社は6000坪と彩帆神社に匹敵する広さを持っていた。今紹介した神社遺構・遺物の残存状況はそれを窺わせるに十分なものであった。

サイパン島の泉神社（1940年創建、氏子区域泉村一円）もジャングルの中に埋もれてしまっている。そしてカラベラ神社ほどではないが、鳥居1基、燈籠台石2つ、石段2つ、基壇1つが残っており、神社の在りし日を偲ぶことができる（写真27）。

サイパンのこれら2つの神社跡地は、文字通り、「放置」されジャングルの中に埋もれてしまった例であるが、同じ旧南洋群島に建てられた神社の中でもテニアン島に建てられた神社跡地は「放置」といっても少し説明が必要になってくる。テニアン島の3つの神社跡地、すなわち橘神社、羅宗神社、NKK神社の跡地のうち、後2社は厳密には「放置」と言い難いものである。というのは、この2つの神社跡地は旧参道から本殿跡まで、連邦政府（観光担当）の職員の手によって、月2回草刈が行われているとのことであり、また、NKK神社には次に述べるように解説の石碑まで建てられているからである。

私共が調査に訪れたのは、8月の中旬であったが、この時は6月に襲った大きな台風の被害のために、手が回らずしばらく草刈は出来なかったため、羅宗神社跡地の場合は、人の肩あたりまでの草に覆われていたが、それでもそう言われるとその草は新しく伸びた柔らかな草で（雨季で高温の季節であるので成長が早い）、旧参道から本殿跡まで迷わず到達する事ができた。羅宗神社はテニアン島チューロに1939年に建てられたもので、南洋興発株式会社の直営農場を氏子区域にしていた。神社跡には、社号標（写真28）、大燈籠1対（2基、上部なし、写真29）、燈籠1対（2基、上部なし）、階段、本殿基壇、玉垣の一部などが残されていた。

また、NKK神社はテニアン島の第4農場(南洋興発株式会社）の関係者によって、1941年に建てられたもので、鳥居2基（写真30）、燈籠6基（3対）、

写真29　同前。放置されたままの大燈籠。

写真30　旧南洋群島テニアン島、南洋興発の第4農場の関係者によって建てられたNKK（南洋興発株式会社）神社跡地に今も残る、一の鳥居。社殿までの参道は連邦政府の職員の手で草が刈られている。

写真31　同前。二の鳥居のたもとに設置された、解説石碑。

本殿基壇、本殿を囲む柵（玉垣）の一部が残り、神社の面影をほぼ完璧に残していた。[29] さらに、注目されるのは、この神社跡地の、二の鳥居の前には、次のような英文と日本語の解説石碑が立てられており、つまり人の訪れる事が前提にされている（写真31）。

「熱帯の中の日本：NKK神社（1941年）／NKK神社は砂糖キビ運搬用の線路の支線横にあり、その名前から砂糖会社の南洋興発会社（NKK）によって建設されたことが解ります。柱の一本には1941年建立と記されています。神殿への道路には聖域への入り口を意味する2つの鳥居があります。ここに見られるのは1900年代初期に日本で盛んに造られた明神鳥居と呼ばれるもので、笠木の両端が上に反っています。京都の賀茂神社に造られたのが最初のものと言われ、東京の明治神宮の鳥居は最も有名なものです。テニアンの日本人による開発は、南洋興発会社がサイパンからテニアンに進出した1926年頃に始まりました。テニアンは特に砂糖キビの栽培に適しており、10年以内に島の8割が砂糖キビ畑になるほどの大耕地となりました。砂糖耕地の拡大に伴い、テニアンは日本人と日本文化の島と化しました」。

ここには日本文化（鳥居）の紹介と日本人（南洋興発株式会社）による島の開発（砂糖キビ畑）の様子が淡々と記されている。

この意味でこの二つの神社、羅宗神社とNKK神社の跡地の場合は純然たる「放置」とは異なり、Ⅳ章で詳しく述べるように、日本人観光客を誘致するための施設、その意味で「改変」の例に入れてもよいものである。しかし、神社遺構そのものには手を加えられていないので、その点に注目して、この「放置」の項目にいれた。

テニアン島のもう一つの神社、橘神社跡地は、また少し異なる。この神社は1939年にテニアン島カーヒーに建てられ、カーヒー並びに第3農場を氏子区域にしていたが、道路から参道に入るまでは、羅宗神社跡地と同じように草が刈られた状態であったが、その先、社殿にいたるまでは、完全にジャング

写真32　旧南洋群島テニアン島、南洋興発第3農場の関係者によって建てられた橘神社跡地。ジャングルに埋もれ放置されたままになっている倒壊した鳥居。

写真33　旧昭南島（シンガポール）に建てられた昭南神社跡地。神橋（太鼓橋）の橋脚（木）が今も水面に点々と顔を覗かせている。正面奥が社殿側、手前はゴルフコース。

写真34　旧朝鮮に建てられた神明神祠跡地遠望。中央のこんもりした山の裾に神殿は建っていた（全羅南道和順郡綾州面神明神祠跡）。

写真35　旧朝鮮の神祠社殿前の広場横から広場および集落を見る。面事務所なども見通せたであろう（全羅南道和順郡二西面神明神祠）。

写真36　旧朝鮮全羅南道和順郡寒泉面神明神祠跡地に残る、神殿テラス前の石段。

ルに覆われていた。燈籠2基（上部欠け）、手水鉢、倒壊した鳥居（写真32）、本殿の基壇、玉垣（一部欠け）などが残されていた。

以上、「放置」されたままになっている神社の内でも、神社の遺構・遺物が比較的よく残っている例を紹介したが、残りの神社はそれらの一部が残されているだけである。

いくつか、紹介しておこう。銅門祠は旧台湾花蓮港庁下蕃地ムクムゲ社に1937年に鎮座した社である。現在神社跡地には砂防堤が走っており、神社の面影を窺うことは出来ないが、境内に建てられていた、巨大な忠魂碑が残っている。同じく、花蓮港庁下カウワン社に1938年鎮座したカウワン祠は、現在、1基の鳥居と石段の一部を残すだけである。

旧樺太の泊居支庁の泊居町大字追手に1931年に建てられた追手神社跡地には、鳥居台石など石造物の残骸が散乱していた。

旧昭南島の昭南神社は1943年11月、シンガポールを占領した日本軍の手により、南方鎮守のシンボルとして創建されたもので、その建設にはイギリス・オーストラリアの約2万人の捕虜が使役された。[30] マクリッチ貯水池の西の端、貯水池に注ぐ小川を伊勢の五十鈴川に見立て、そこに朱塗りの神橋（太鼓橋）をかけ、対岸のこんもりと繁ったジャングルを切り開いて本殿が創られた。3段の長い階段、3つの鳥居を持つ巨大な神社であったが、敗戦とともに、軍の手によって爆破された。

写真37　旧樺太豊原市に建てられた樺太神社跡地。参道はほぼそのままの形で残り、途中には燈籠の基壇も点々と残る。この正面手前に鳥居が立っていた。境内は勝利公園の一角となっている。

写真38　旧中華民国青島に建てられた青島神社跡地。　参道はほぼそのまま残り、奥に大石段が見える。これを上がっていくと社殿跡に出る。現在はこの一帯が文化活動広場（公園）になっている。

今日、神橋の木製橋脚が点々と顔を覗かせている（写真33）他、ジャングルの中には、階段や手水鉢、社殿基壇等が残っている。

旧朝鮮全羅南道和順郡の神祠（神明神祠を含む）跡地も多くが「放置」されたままである。和順郡の神明神祠や神祠は全部で13社あり、その全てを調査することが出来たが、この内7社が終戦直後に破却されそのまま「放置」されたままになっている。神祠は多く、集落を見下ろし、また集落から見上げられる小高い丘や山裾を切り開いて建てられたが（写真34、35）、今日、元の山林や原野に戻っている。そして、全く痕跡を留めないもの、あるいはかろうじて崩れた石段（写真36）や基壇部分が確認されるだけである。ただし、このうち、神殿の前庭・広場部分のみ畑として利用されているのが3社ある。[31]

(4)「改変」されている例

最後に、改変され、人の手が加えられて、現在何らかの形で利用されて、景観を変容させている神社跡地について見ておこう。

【公園】

神社は平地の、街の中心部に創られる場合もあったが（旧中華民国の北京神社、天津神社、旧満洲の建国忠霊廟や新京神社等の満鉄附属地神社、旧台湾の新城社等）、多くは街の中心から外れた、小高い丘陵、山裾に創られた。

これは、日本においても伝統的に見られる、神社立地の一つであるが、海外神社においては、この点は意識して創られた。神社というものが街の鎮守として、また日本の支配のシンボルとして位置付けられたため、街を見下ろす、また街から仰ぎ見ることの出来る、小高い、風光明媚な場所が求められたのである。[32]

また、神社の清浄感を保つためにも、大きな神社では、境内地に隣接して公園が設けられた場合もあった。こうしたことから、今日、神社跡地がそのまま、公園として整備されている例が多い。朝鮮神宮跡地の南山公園、樺太神社跡地の勝利公園（写真37）、龍頭山神社の龍頭山公園、青島神社の文化活動広場（写真38）などであり、そのほか、旧朝鮮の光州神社は光州公園、羅州神社は南山市民公園となっている。また、街の中の平地に建てられた神社でも、吉林神社が児童公園となっている例もある。とくに、旧満洲の満鉄附属地に建てられた神社（満鉄附属地神社）はもともと公園の一角に建てられた例が多いが、鉄嶺神社跡地はそのまま公園として残っている。[33]また、こうした広い境内、隣接して公園をもっていた官国幣社やそれに準じる神社だけではなく、例えば旧台湾において社（祠）として建てられた壽社（山裾に立地）も中山公園として整備されているし（写真39）、後で見る新城社（街の中心部に立地）の境内もその半分は新城公園として利用されている。また、先に見た旧朝鮮の和順郡の13の神祠の内、和順面神明神祠他2社の跡地が公園になっている。さらに、旧南洋群島の日の出神社（テニ

写真39　旧台湾花蓮港庁壽庄に建てられた壽社跡地。現在は中山公園になっている。階段は旧神社時代のもの。

写真41　旧台湾花蓮港下新城に建てられた新城社跡地。旧境内の半分は現在、天主教会の敷地になっている。天主教会の標識が架かる一の鳥居。

写真40　旧南洋群島テニアン島に南洋興発第4農場の関係者によって建てられた日の出神社跡地。現在はメモリアル・パークになっている。後方に燈籠が見える。

写真42　同前。燈籠は宝珠・火袋の部分が改変され、また彩色されている。

アン島アンガー、氏子区域第4農場、1939年創立）もメモリアルパーク（写真40）として整備されている。

【宗教関連施設】

神社跡地が今日、宗教施設として利用されている場合も多い。まず、キリスト教会あるいは、同教祠あるいは同墓地として利用されている例を紹介しておこう。まず、旧台湾花蓮港庁研海庄新城に建てられた新城社の例である。新城社は1937年に鎮座した社であり、新城の街の中に建てられた。今日、先に紹介したように、境内の半分は新城公園となっているが、残りの半分は、天主教会となって利用されている。しかも、鳥居2基、燈籠8基、狛犬4体、本殿基壇等が部分的に改変されながら極めてよく残っている（写真41、42）。本殿部分は「聖母園」と命名され、本殿の基壇の上にはマリア像が建てられている。また、それを取り囲むように松の大木が育っている。マリア像がなければ、ほぼ完璧に神社の社殿といった雰囲気である。いずれにしても、日本人の常識的な教会の景観としては異様なものであった。

台湾には、もう一つ教会に改変されたものがある。旧花蓮港庁下、鳳林郡馬太鞍にある馬太鞍遥拝所跡地に建てられた、光復教会である。現在、遺構・遺物は残っていなかったが、門に至る道は旧参道である。

なお、この教会には、この地で布教活動にあたっ

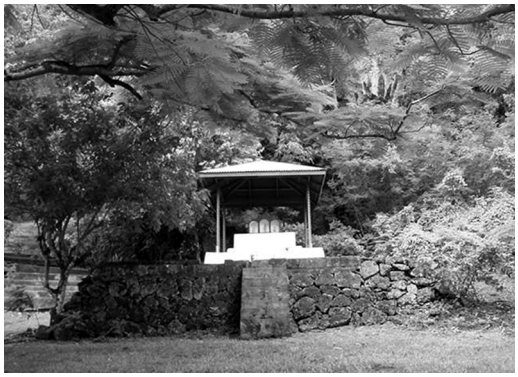


写真43　旧南洋群島ロタ島ソンソンに建てられたロタ神社跡地。旧本殿基壇の上にはキリスト像が祀られている。

写真44　同前。キリスト像。

写真45　旧南洋群島テニアン島に南洋興発第2 農場の関係者によって建てられた和泉神社跡地。旧本殿基壇の上にキリスト像とサン・イシドル像が祀られている。

た許南免牧師の記念館があるが、その入り口に掲げられた説明文の「序」には、第2次世界大戦時の日本統治下のキリスト教の迫害について、「(前略）漸受日警厳密監視伝道不易毎於更深夜静聚集於曽王蘭宅査経学道信者惨遭窘遂或被拘捕禁錮者甚衆（後略)」とある。

次に、旧南洋群島の例である。まず、ロタ島の中心街ソンソンに1939年に建てられたロタ神社（氏子区城ロタ島一円）の例である。マニラ高地が海岸に迫って崖を成しているその下部、崖を背景として建てられていた。現在、本殿基壇、拝殿の基礎部分、そこに至る階段部分が残っているが、本殿基壇の上には白い教祠が設けられ、キリスト像が祀られている（写真43、44)。

また、テニアン島マルボ市街の山裾に1939年に建てられた和泉神社（氏子区域マルボ市街並びに南洋興発株式会社の第2農場）も同じくキリスト教祠となっている。現在、本殿の基壇とそれを取り巻く玉垣が残っているが、本殿基壇の上には教祠が建てられ、キリスト教関係像が祀られている（写真45、46)。本殿跡の周囲はこの教祠の祭りに使われるいくつかの施設が建てられている。

教会・教祠ではないが、キリスト教墓地として利用されている例もある。サイパン島の南興神社跡地である。南興神社は1937年チャランカに建てられた。氏子区域が南洋興発株式会社社員及びチャランカ町一円とされているように、チャランカの町には、日本の南洋群島開発に巨大な役割を果たした南洋興発株式会社の本社があり（1923年～1942年)、製糖工場や燐鉱工場、倉庫群、社宅群が立ち並んでいた、いわば企業城下町であった。南興神社の南興はこの南洋興発株式会社の名前をとったものであった。

この跡地には、鳥居（白く上塗りされている。写真47)、燈篭4基（2対、内1対は本殿基壇上、白く上塗りされている)、そして本殿基壇が残っているが、今日、境内地一帯が教会墓地になっている。本殿基壇の上には白い小屋が設けられ、十字架に架けられたキリスト像が祀られており、また基壇の前にも苦しみに耐え横たわるキリスト像が置かれている(写真48)。なお、この南興神社の隣には製糖工場があったが、現在ここには大きな教会が建てられている。

次に、寺院となった例を紹介しておこう。旧台湾花蓮港庁壽庄に建てられた豊田神社である。豊田神社は1915年、壽庄豊田村に建てられた。豊田村は1910年代に台湾総督府が開発した移民村で、花蓮港庁にはこの豊田村の他に吉野村、林田村などが造

写真46　同前。キリスト像と聖人イシドル（農業守護聖人）像。

写真47　旧南洋群島サイパン島チャランカに建てられた南興神社跡地。キリスト教会の墓地の中に立つ鳥居。真っ白に塗られている。

写真48　同前。旧本殿基壇の上に小屋がしつらえられ、中に十字架に架けられたキリスト像が立つ。階段左脇にも苦悶するキリスト像が横たわっている。

写真49　旧台湾花蓮港庁壽庄に建てられた豊田神社跡地。今日、碧蓮寺となっているが、その入り口に立つ燈籠。

写真50　旧台湾花蓮港庁瑞穂庄拔子に建てられた拔子社跡地。個人の墓になっている。

写真51　旧台湾花蓮港庁花蓮港街に建てられた花蓮港神社跡地。現在、花蓮縣忠烈祠に改変されている。

られた。したがって、この神社は「内地人官営移民村の守護神として総督府において建立鎮座せし」ものであった。この神社跡には鳥居1基、燈籠4基（2対、写真49）、狛犬2体が残存しているが、今日碧蓮寺として利用されている。境内には松や楠の大木が育っている。

最後に、廟・小祠として利用されている例を紹介しておこう。旧台湾花蓮港庁の3つの社（祠）である。太巴塱祠は1937年、鳳林郡太巴塱に鎮座した社（祠）であるが、現在は協天宮となっており、また、1931年に玉里郡玉里街に鎮座した観音山社（社）は福徳祠という小祠になっていたが、いずれも神社の遺構・遺物は発見されなかった。もう一つの織羅社も1937年に同地に建てられたが、その跡地は廟の建設中でブルトーザーによって整地がなされていた。

写真52　旧台湾高雄州高雄市に建てられた高雄神社跡地。今日、高尾縣の忠烈祠に改変されている。社殿に上がる階段は、旧神社時代のもの。

写真53　旧台湾花蓮港庁下、蕃地タビトに建てられた佐久間神社跡地。旧階段の上に文天祥像と正気歌の歌碑が建つ。

この他、個人の墓地として利用されている例は、旧台湾花蓮庁下瑞穂庄拔子に建てられた拔子社（1931年鎮座）である。ここの神社跡地は比較的神社の面影をよく残している。階段、燈籠4基（2対）、鳥居の柱穴4つ（2対）などが残っている。階段を上りきったところに個人の墓地があった（写真50）。また、旧朝鮮の和順郡の神祠は多く小高い丘や山林を切り開いて建てられたということは、先に述べたが、その際風水も考慮され、日当たりや水はけが良いところに建てられた。そうしたこともあって、東面神明神祠他1社の跡地が墓地として利用されている。

【忠烈祠】

宗教施設といってもよいのだが、戦前の日本の靖国神社・護国神社と同様、いわば国家的祭祀施設として利用されているのが、台湾の神社跡地である。

台湾神宮を除いて、旧台湾に建てられた官国幣社、県社クラスの多くの神社跡地が、忠烈祠として利用されている。忠烈祠とは、注（15）で詳しく触れたように中華民国の建国理念に沿った「国事殉難者の軍事官吏等」を祀ったものである。

1940年に日本の靖国神社・護国神社の制度に倣って、台北市に台湾護国神社が建てられたが、戦後は台湾の忠烈祠に改変された。筆者が見た限りでは、台湾護国神社の遺構・遺物は発見できなかった。

1912年に創立された花蓮港庁の中心的神社、花蓮港神社（後に県社）は、南に花蓮港市街、東に太平洋を望む小高い丘（米崙山）の中腹に建てられた神社であったが、今日花蓮縣忠烈祠となっている。ここでも、階段部分を除いてその他の神社遺構・遺物は見ることは出来なかった。この、花蓮港神社は川（米崙溪）にかかる吊り橋のある神社として有名であったが、今日はコンクリートの橋が架かっている（写真51）。

1912年に鎮座した、高雄市の高雄神社（後に県社）も今日、高雄縣の忠烈祠になっている。ここでは、燈籠（上部は改変）や階段、鳥居などが残っている（写真52）。

このほか、筆者が直接見た神社跡地で忠烈祠に「改変」された例として、桃園神社が桃園縣忠烈祠となっている事は、すでに見た通りである。

【銅像・記念碑・記念館など】

神社跡地に銅像や記念碑、記念館が建てられている例もある。

1923年に旧台湾、花蓮港庁下の「蕃地」（先住民族の居住地）タビトに建てられた佐久間神社は、[34]今日、文天祥の銅像並びに「正気歌」の歌碑が建てられている。「蕃地」タビトは、今日は天祥と呼ばれ、タロコ国立公園の中心地になっている。この地は、3000mを超える中央山脈から太平洋に流れ込む立霧溪の激流が大理石の深い峡谷を造りあげており、かつてこの断崖絶壁の峡谷に先住民タロコ族の部落（社）が、点々と存在していた。

日本の台湾植民地支配にとって、漢民族による抗日武装闘争とともに、山岳先住民族の抵抗にも大きな力を注がなければならなかった。この山岳先住民

写真54　同前。文天祥像。後方に巨大な歌碑の1部が見える。

写真55　旧南洋群島ロタ島に建てられた大山祇神社（マニラ神社）跡地。旧社殿前には1973年9月、ロタ島の政府関係者等による「平和記念碑建立委員会」の手によって、記念碑「平和の礎」（細見卓・書）が建立され、メモリアル・パークとなっている。

写真56　旧台湾花蓮港庁下、壽庄に建てられた壽社跡地。中山公園に改変され、旧社殿跡に孫文像が立つ。

族の「統治」に大きな役割を果たしたのが、「理蕃総督」といわれた第5代総督佐久間佐馬太（1844～1915年）であった。佐久間は、険しい峡谷を利用して最後まで戦いを継続していたタロコ族を、自ら軍隊・警察を率いて5年もの歳月をかけて、1914年にようやく制圧した。佐久間神社は、この作戦中に佐久間総督が重傷を負った「ゆかり」の地であり、後、タロコ警察行政の中心地となったこの地に、総督の名をとり、また総督を祭神として建てられた神社である。そういう意味では、日本（台湾総督府）の山岳先住民族支配のシンボル的存在であった。

今日、この神社跡には、長い階段や石組み等が残っているだけで（写真53）、その他の遺構・遺物は無い。そして、ここには石段の途中、旧拝殿あたりに文天祥の銅像が建てられ（写真54）、さらに上った旧本殿あたりに、彼が詠んだ「正気歌」の歌碑が立っている。文天祥は南宋末の宰相で、元の支配と戦い捕らえられたが、最後まで漢民族の宋王朝への忠誠を曲げずに処刑された「忠臣」であり、彼が獄中で作った長詩「正気歌」は、この宋に忠誠を尽くす気持ちを歌った有名な歌である。ちなみにこの歌は日本においても、藤田東湖や吉田松陰といった幕末の「勤皇の志士」達にも大きな影響を与えたものである。台湾政府（中華民国）の漢民族の国家としての正当性をアピールする意図をもって建てられたものであろう。

神社跡地が、社殿部分を中心に銅像・記念碑や記念館などに改変されて利用されている例は、もう一つ、旧南洋群島のロタ島に建てられた大山祇神社（マニラ神社）である。大山祇神社はマニラ山（サバナ高地）の最高地を北側に少し下った平坦部に建てられたが（創立年不明）、ここは南洋興発株式会社の燐鉱山（1935年発見）があった所である。鉱山の神ということで大山祇命が祀られた。ロタ島が海底から隆起した事を証明する安山岩の双子岩（貝殻が多数付着）を背景に社殿と鳥居等が建てられて

写真57　旧樺太樺太神社跡地は勝利公園となっているが、その一角に立つ兵士の銅像（対日戦勝利）。

写真58　旧朝鮮光州神社の社殿跡地に建つ慰霊碑（朝鮮戦争戦没兵士）。

いた。今日、社殿の基壇のみが残っているだけであるが、ここは「平和の礎」が建てられ、その前の境内部分は草地となり、また休憩所が建てられて、ピクニック地を兼ねたメモリアル・パーク的なものになっている。したがって公園あるいは後で述べる観光施設としても位置づけられるものである（写真55）。

この「平和の礎」は、1973年9月に建てられたもので、経緯を書いた石碑には「第2次大戦中ロタ島に於て戦没されたすべての方々の御霊を慰めるとともに、ロタ島の人々及び日本国民との友情と親愛を深め恒久平和を祈願して建立されたものである。1973年9月16日　平和記念碑建立委員会　アントニオCa．アタリ　ロタ島政府　市長　プルデンシオT．マングローナ　ロタ島地区　行政官」[35]とある。

この他、神社跡地全部が記念碑等になったのではないが、神社跡地が公園として整備された所では、その中の一角に銅像等が建てられている。たとえば、先に見た中山公園となっている旧台湾の壽社跡には孫文の銅像が建てられているし（写真56）、朝鮮の龍頭山神社跡地の龍頭山公園には、秀吉の朝鮮出兵時（文禄の役）に朝鮮の水軍を率い、亀甲船を考案して日本軍の補給路を撹乱した李舜臣の銅像が立っている。さらに、朝鮮神宮跡地の南山公園には1909年、初代統監伊藤博文を射殺した朝鮮の独立運動家安重根の記念館が建てられている。そのほか、今日、勝利公園に「改変」されている樺太神社跡地には対日戦争勝利（第2次世界大戦）の兵士の銅像が建っているし（写真57）、光州公園となっている旧光州神社の本殿部分には、朝鮮戦争やその後のパルチザン闘争で亡くなった兵士の慰霊塔が建てられている（写真58）。

「文化財等」

以上の銅像・記念碑、記念館等に関連して、神社を日本の植民地支配の歴史的証人として、文化財として保存されているものが、先に述べた旧朝鮮の小鹿島神社である。この神社の入り口には、当時の写真と共に、この神社の成立の由来が次のように書かれている（写真59）。

「神社／神社は日本皇室の祖先や日本人固有の信仰対象の神、または国家に大きな功労を収めた人を神として祀ったお堂をいう。この神社は1935年5月28日第4代院長周防正季が在任当時建築したもので、鉄筋コンクリート建築物として天照大神をまつり、参拝するようにした。また、病者地帯にも同じ時期に分社（ウチョン福祉館の裏にあったが、解放当時消失）を建立し、毎月1日、15日を神社参拝日として定め、患者たちに義務的に参拝するようにし、夫婦同居を許可する場合、夫婦病舎に入舎させる前に神社参拝を強制した」（原文ハングル）。

また、実現されていないが、満洲の建国忠霊廟も文化財として残そうという動きがあるのは先に述べた通りである。さらに、先に紹介した忠烈祠として利用され、神社の遺構が木造の社殿を含めて最も残っている台湾の桃園忠烈祠は、説明の看板などはないが、この忠烈祠をめぐっては1990年代に解体か

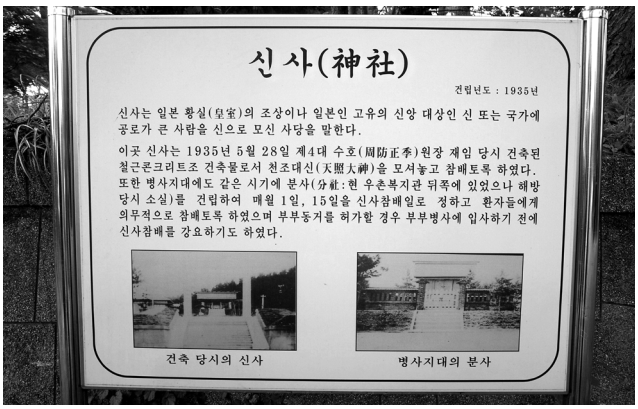


写真59　旧朝鮮小鹿島神社跡地の入り口に立つ、解説板。

写真61　旧朝鮮全羅南道和順郡春陽面石亭里に建てられた春陽面神明神祠跡地。一帯は公園に改変されているがその一角に立つ「抗日闘士石軒李公鎮南紀蹟碑」には、神社破却のことが記されている。

保存かをめぐって論争されたが、日本の植民地支配の証左として新たな読み替えを行って忠烈祠として保存利用されることになったという経緯がある。

しかし、最初に見たように、神社はその痕跡を意外に多く留めているのだが、その遺構・遺跡が日本の植民地支配の歴史的証人として積極的に利用されている例は意外に少ない。建物や遺構跡がそのように位置付けられて、その旨が明示されている例は、

写真60　旧満洲国建国神廟跡地に立つ説明版。英語・中国語・日本語で書かれている。

写真62　遼源鉱工墓陳列館に展示されている、発掘された人骨。

上に紹介した旧朝鮮の小鹿島神社と旧満洲国の建国神廟の2例だけである。

建国神廟の例も紹介しておこう。かつての満洲国皇帝溥儀の皇宮（現偽満皇宮博物館）にある建国神廟跡（「建国神廟」遺址）には次のような説明文が中国語、英語、日本語で書かれている（写真60）。

「建国神廟は日本式の木造の神社であり1940年に建てられたものである。『惟神の道』を核心とした思想支配を強化するために、同年7月日本関東軍は溥儀を訪日させ、日本肇国の祖先とされる『天照大神』を偽満洲国の『建国元神』して供えさらにそれを信仰し祭祀することを、東北人民に強制するよう意を授けた。1945年8月11日夜、溥儀が皇宮を逃げ出した際に、関東軍の放火で焼かれ、今は礎石だけ残っている」。

また、神社跡地にここが神社の跡地であることを植民地支配の問題として間接的に記した記念碑や説明文があるのも、先に紹介した馬太鞍遥拝所や次章

写真63　陳列館には、旧満洲国時代の日本による中国人の精神的支配についてのコーナーが設けられている。

写真64　同前のコーナーの西安神社の部分。

で紹介する高雄神社、それに春陽面神明神祠の跡地だけである。旧朝鮮全羅南道和順郡の春陽面石亭里の春陽面神明神祠は面事務所や学校などが集まる集落の北方の小高い丘に建てられたが、今日、その跡地は公園として整備され「詠楽亭」と名付けられた東屋も建てられている。この公園にはいくつかの石碑が建てられているが、その一つに「抗日闘士石軒李公鎮南紀蹟碑」(2003年建立）が建てられている。その文中に「(前略）日帝が敗亡して祖国が光復したので八月二十日下山即時清豊面建国委員会を組織秩序を回復して面内青壮年を動員神社堂を焼却倉庫保管糧穀を各里に分配して……（後略)」(ひらがな部分ハングル、写真61）と神社（神祠）の破却の事が記されている。

もっとも、先に紹介した旧満洲国の西安神社の場合は、その神社遺構の現場にはそうしたものは見られないが、少し離れた工場（炭鉱）地帯に建てられている「日偽統治時期遼源鉱工墓陳列館」には西安神社が中国人の精神を麻痺させるものであったと、はっきり位置づけられている。この鉱工墓には、旧満洲国時代西安鉱業所の鉱山労働者として「酷い待遇」を受けて亡くなった中国人の人骨が展示されており（写真62)、中国における大量の人骨展示としては南京や平頂山などと共に代表的なものである。その陳列館にはさまざまな「日本の植民地支配の罪状」が展示されている。その一角に「愚弄・精神摧残」と題して10余枚の写真が解説付きで掲げられたコーナーがあるが（写真63)、その中には、「日本帝国主義者強迫中国人毎天面対東京方向遙拝」と解説された、早朝神社の境内で東方遙拝させられる中国人の写真などと共に「日本軍国主義者在西安建立的神社」と解説された西安神社の写真が掲げられている（写真64)。

その他、審陽（旧奉天）の“九・一八”歴史博物館には、「植民地支配の罪状」として建国神廟のコーナーがあり、また、この博物館に入ったとき最初に目にするのは、戦前の靖国神社に参拝する正装した兵士集団の巨大写真である。

【教育施設】

神社跡地が学校や幼稚園として利用されている場合も多い。旧関東州の大連神社は、1909年に創立された大連の南山にあった神社で、関東州・満洲に建てられた神社としては、同市の転山屯に建てられた関水神社に次いで、二番目に早く建てられた神社である。[36]

大連神社は1944年旅順に官幣大社関東神宮が鎮座するまで、大連だけではなく関東州の中心的神社であった。境内地約3万坪、本殿など社殿は11棟もある官国幣社クラスの神社であった。今日、神社の遺構・遺物は全くなく、小学校（解放小学校）の建物、グランドとなっている（写真65)。

旧満洲の長春（後、新京特別市）敷島区に建てられた新京（長春）神社は1915年に創立された長春の中心的神社であるが、この神社跡地には鳥居や拝殿等が残り幼稚園(長春市人民政府機関第二幼稚園）として利用されていることは、先に述べた通りである。[37]

旧樺太の亜庭神社は、1914年大泊支庁大泊町に

写真65　旧関東州大連市に建てられた大連神社跡地。 現在小学校の敷地となっている。

写真67　同前。旧社殿跡地に建つ、船舶カレッジの建物。

建てられた後、県社となった大泊支庁の中心的神社である。[38] 今日、階段、手水鉢、鳥居の礎石らしきものが残っているが（写真66）、階段を上りきったところは船舶カレッジのキャンパスになっている（写真67）。

この他、旧南洋群島のテニアン島全体の鎮守として、1934年に建てられた天仁安神社は1944年7月の米軍の爆撃によって完全に破壊されたが、今日その跡地は学校（小、中合同）が建っており、遺構・遺物は発見できなかったが、敷地の一部に鳥居の柱らしき残骸が転がっていた。なお、学校の近くにタガ遺跡があり、その側に長野の遺骨収集団や岐阜県マリアナ会などによって慰霊碑が建てられている

写真66　旧樺太大泊支庁大泊に建てられた亜庭神社跡地。 旧階段と燈籠基壇、それに手水鉢（階段左、二本の樹の左側に見える）が残る。

写真68　旧樺太豊原市に建てられた樺太護国神社跡地。今日、ユジノ・サハリンスク市立病院が建てられている。

写真69　同前。旧本拝殿の基壇。病院の最後方、裏庭のような恰好になっている。

が、[39] そこには天仁安神社の大燈籠の傘の部分や基礎の部分らしきものがある。

さらに、旧関東州の小野田神社（大連市泡崖屯、1922年創立、セメント工場があった）、旧満洲間島省で最も早く日本総領事館前に建てられた（1925年創立、龍井街）間島神社の跡地も学校の敷地になっているが、遺構・遺物などは全く発見できなかった。この他、旧朝鮮の順天神社跡地が児童福祉施設

写真70　旧中華民国天津市に建てられた天津神社跡地。今日八・一礼堂が建っている。

（順天聖信園）として利用されていることは、先に見た通りである。

【病院】

病院となっているのは、2つある。一つは、先に紹介した旧樺太の樺太護国神社跡地である。樺太護国神社の前身は、日露戦後の1908年豊原神社の招魂祭に始まり、1925年に大正天皇の大礼記念事業として、同社の境内社として創建された樺太招魂社である。1935年、豊原旭丘の樺太神社の南隣に移転、1939年護国神社の制度が施行されるとともに樺太護国神社と改称された。[40] 境内の敷地は6000坪、これに周囲の山をあわせると清浄閑雅な神域は37000坪に及んだ。現在この境内地にはユジノ・サハリンスク市立病院が建っている（写真68）。病院は旧境内の階段を利用して3段にわたって建てられ、最後方はウイルス棟になっている。本拝殿部分はちょうど病院の後庭の役割を果たし、病院関係者や患者の散策地になっている。現在、遺構・遺物としては、階段、本拝殿の基壇（写真69）、燈籠台石等が残っており、また病院の右側の通路の並木の下には、燈籠台石のようなものが残されており、「奉献／佐々木時造／昭和十年　月」の文字が彫られていた。さらに後方、造成中の土地には燈籠の傘の部分と思われるものが転がっていた。

もう一つは、旧関東州大連市霞町に建てられた沙河港神社跡地である。1914年10月に創立され、大連神社に匹敵する規模をもった神社であった。大連神社は日本人住宅街にあったため、現地人にとってはやや近寄り難い雰囲気をもっていたためか、大連神社よりこちらの沙河港神社の事をよく覚えている人が多かった。

日本時代に建てられた、沙河港駅前の大通りを南行するとロータリーに出るが、その北東の角が神社跡地である。今日、大連市口腔医院の大きな建物が建っている。神社の遺構・遺物は全く見つからなかった。

【軍施設】

軍関係の施設になっているものとしては、まず台湾の旧花蓮港庁下に建てられた吉野神社跡地がある。吉野神社は先程紹介した豊田神社と同じく、官営移民村に建てられた神社で、花蓮港庁下では最も早く1912年に鎮座している。

現在、神社跡地は半分に仕切られ、半分は旧郡長宅、そして残り半分が兵舎として利用されている。境内地を画する石垣はほぼそのまま残り、その中に日本家屋も残されているが、その他の遺構・遺物は見つからなかった。

旧中華民国の天津日本租界、天津市福島街の大和公園に建てられた天津神社は中華民国に建てられた神社としては、青島神社についで2番目に古い神社で、1915年に建てられた。現在、この地には「八・一礼堂」が建てられているが（写真70）、神社の遺構・遺物は発見できなかった。

この他、旧中華民国の上海の日本租界（英米共同租界）に建てられた上海神社（1933年創立）は、その境内に1932年の上海事変の戦死者を祀る招魂社を設けていたが、今日は軍関係のビルが建っており、神社の遺構・遺物は全く見られない。また、旧関東州の旅順市の高台、大正公園に紀元2600年を記念して「満洲の地に官幣大社」をとの運動により1938年創立、日本の敗戦の前年の1944年10月に鎮座した官幣大社関東神宮跡地[41]には、今日海軍の施設

写真71　旧朝鮮全羅南道木浦府松島町に建てられた松島神社跡地。旧社務所前から見た旧境内。すぐ目の前あたりに社殿があったはずだが、家が密集して建っている。

写真72　同前。旧社務所外観。左の建物が旧社務所である。外観は改装が甚だしくかつての面影はない。

写真73　旧樺太神社跡地の社殿部分に建つ会社事務所。

写真74　旧朝鮮京城府南山に建てられた朝鮮神宮跡地。本殿部分は今日、南山公園の温室（植物園）になっている。

が建てられている。さらに旧満洲の四平街神社跡地も、軍関係施設となっている。

【その他】

以上、社殿が残っている場合はそれがどのように再利用されているのか、また全く残っていない場合はその神社跡地にどのような工作物が建てられているのかを、主な工作物毎に見て来たわけであるが、最後にその他の例を見ていこう。

まず、社殿の一部が今日残っているものから見ていく。旧朝鮮の全羅南道木浦府松島町に建てられた松島神社跡地には社務所や納屋などの建物が残っており個人の居宅として利用されていると述べたが、境内全体にびっしりと個人住宅が密集して建てられ、細い路地が網の目のように走っている（写真71、72）。ここは戦後すぐ、満洲地域から引き揚げて来た朝鮮人の仮の住まいとして用意されたものであるが、そのまま住宅地として定着したものである。この他、本殿跡地部分は児童福祉施設（順天聖信園）が建てられ、旧社務所が個人の住宅として現存していると紹介した旧朝鮮の順天神社跡地も、実は戦後直後には、この松島神社跡地同様、本殿跡地部分は、満洲地域からの引揚者のための住宅地となっていたそうである。この2例は神社跡地の利用のされかたとしては、他の地域には見られない特色である。

また、旧満洲の西安神社も拝殿部分が一部手を入れられ、現存していることは、すでに述べた通りであるが、これは今日、遼源鉱務局再就職斡旋所として利用されている。

以上が社殿が残っている場合であるが、次に社殿は残っていないが、跡地に新しく工作物が建てられ

写真75　旧台湾台北市に建てられた台湾神宮跡地。 今日、圓山大飯店が建っている。

写真76　旧樺太真岡町に建てられた真岡神社跡地。 旧石段の上に建つ、サハリン郵船会社。

ている例を紹介しておこう。

すでに、公園になっている例で一部見てきたが、樺太神社の社殿跡地には、戦後すぐに共産党幹部のクラブハウスが建てられたが、今日では会社の事務所になっている（写真73）。なお、ここにはコンクリート造りの宝物殿が放置されたまま残存している。また、朝鮮神宮の本殿跡は植物園（温室）になっているし（写真74）、青島神社の本殿部分は青島有線電視台になっている。また、本殿跡地がジャングルの中に埋もれている例として紹介した、シンガポールの昭南神社の旧境内の一部はゴルフ場の一角となっている。

その他、1933年に創立、翌年鎮座した旧台湾の総鎮守、官幣大社台湾神社は、1944年6月、従来の北白川能久親王ならびに開拓三神に加えて、天照大神を合祀して台湾神宮と改称したが、その鎮座祭の直前の10月に飛行機が墜落、社殿の一部が炎上した。今日、神社跡地には、台湾の代表的ホテル圓山大飯店が建てられていて（写真75）、神社の遺構・遺物は残っていない。[42]

旧樺太の豊原神社は樺太の中心、豊原市豊原町に建てられた。創立年は1910年で樺太においては最も早く（後、県社に）、官幣大社樺太神社と同年であるが、創建はそれより2年早い1908年である。戦後、敷地跡には保育園が建てられたが、数年前より用途変更されて、現在は死体検死所として使用されている。遺構・遺物としては、燈籠台座らしきものと、鳥居の台石（饅頭）らしきものが彩色されて(保育園時代に手が加えられたものか）残っている。

同じく旧樺太の真岡神社（後、県社）は、豊原に次ぐ第2の都市、真岡町の高台に1910年に建てられた。1945年8月のソ連軍の激しい真岡上陸作戦で社殿は炎上したが、正面アプローチ部分の階段、燈籠台座、手水鉢などが残っている。今日、社殿部分にはサハリン郵船会社の社屋が建っている（写真76）。

また、旧樺太豊原町に1924年創立された北辰神社は、境内の周囲が巾着状に川に取り囲まれる独特な境内地であったが、現在は5階建てのアパート団地になっており、神社の遺構・遺物はまったく見られなかった。

旧中華民国の北京神社は、1940年北京特別市布貢院に、6万人の北京居留日本人の鎮守として建てられた。[43]中華民国には、北京神社創立以前に、これまで紹介した天津神社、青島神社、上海神社など25の神社が創立されていたが、この北京神社は、中華民国の模範となるべき神社として建てられたものであった。実際、蒙疆神社、済南神社、南京神社などは、この北京神社を範として後に創られた。境内地は6000坪で、占領地なので社格は持たなかったが、官国幣社並みの待遇を受けた。現在、この地には中国社会科学院の建物が建っており、神社の遺構・遺物は残っていない。

この他、個人の住宅地になっているのは、先に紹介した南洋神社、それに旧関東州の柳樹屯稲荷神社（1919年創立）の跡地である。また再建されたペリリュウ神社の旧神社跡は採石（ライムストーン）場となっており、旧中華民国で最も早い1915年に創立された青島の台東鎮神社の跡地は今日商店街の中

写真77　旧満洲国撫順市に建てられた撫順神社跡地。今日、公安局退職者用クラブハウスになっている。

写真78　同前。クラブハウス脇に転がっている元鳥居の部材。

写真79　旧樺太真岡支庁野田町に建てられた（野田）稲荷神社跡地。現在牧草地になっている。手前、中央及び右側に旧燈籠の台座らしきものがある。

に埋もれてしまっている。旧満洲の公主嶺神社跡地は駅前ビル、奉天神社跡地は体育館（一部軍関係施設）、撫順神社跡地は公安局退職者用クラブハウスとなっている（写真77、78）。

【農耕地・牧草地・山林】

以上、神社跡地に工作物・営造物が建てられ利用されている例を見てきたが、農耕地として利用されている神社跡地もある。先に紹介した旧台湾の瑞穂祠（檳榔畑）、旧樺太豊原郡川上村の三井鉱山社地に1921年に創立された大山祇神社（畑地）跡地であり、また、牧草地として利用されているのが旧樺太野田町の稲荷神社（創立年不明）跡地である（写真79）。また、本殿部分は荒地、雑木林となっているが広場の部分が農耕地となっているのは、旧朝鮮全羅南道和順郡の清豊面神明神祠（水田）、道岩面神明神祠（唐辛子畑）、二西面神明神祠（桑畑）の跡地であり、また植林されて杉林となっているのが北面神祠跡地である。

Ⅳ　「海外神社」跡地の景観変容の要因

以上、「海外神社」跡地における遺構・遺物の残存状況、同跡地の現況・景観変容の四つの類型について具体的に見てきた。日本の敗戦、植民地体制の崩壊により、機能を停止した海外神社の跡地が、今日、多様な景観をもって存在する事を確認出来たと思う。最後に、では、そのような多様な景観変容をもたらした要因はいったい何であったのであろうか、まだ仮説の段階であるが、このことを考えてみたい。

まず第1に、海外神社の遺構・遺物残存状況、同跡地の現況・景観変容の多様性を考える場合、戦前に日本の植民地や占領地となった地域（日本の勢力圏）が、戦後、どのような国家体制をとったのか、具体的には社会主義国家体制になったかどうかであり、また社会主義国家にならない場合でも、戦後から今日に至る、その国家と日本の関係、これには日本の植民地支配の総括や戦争責任などの、いわゆる「歴史問題」の存在や領土問題の存在なども含まれるが、総じて政治的要因が作用しているということである。

例えば、神社が再建された例が、いずれも南洋群島の神社であったことである。今日、再建された6つの神社（実際に調査できたのは5つ）がある島（サイパン島、パラオ島、ペリリュウ島）、アンガウル島は、戦後、アメリカの信託統治領になったが、1976年にサイパン、テニアン、ロタ島などの一群

が北マリアナ連邦を結成、アメリカの自治領となった。また1981年には、パラオ、ペリリュウ、アンガウル島を一群として、自治政府パラオ共和国が成立した（1994年に完全独立）。そして、一般的にこの両国は、パラオ共和国を筆頭に「親日」意識の強い国（地域）とされている。両国にある、再建された6つの神社の内、最も早い例が1981年の彩帆八幡神社（サイパン島）であり、他もいずれも1980年以降に再建されているという背景には、こうした政治的背景が横たわっているのである。

いわば日本の植民地時代の遺物ともいうべき神社の再建なぞは、社会主義国家体制をとっている旧満洲や旧中華民国（現中華人民共和国、以下、中国と表記）、あるいは旧樺太（1990年まで社会主義のソ連邦であった）といった地域では、宗教政策とも絡んで不可能なことであった。

また、「歴史問題」を抱えている旧朝鮮（現韓国）、中国でも不可能なことであった。結局、南洋群島の地域で神社の再建が可能であったのは、その地につくられた国家が社会主義国でなく、また「歴史問題」を表だって抱えていない、日本国との関係が良好な国家であったから可能なことであった。

また、台湾において、例えば桃園神社が忠烈祠に改変されたとはいえ、旧社殿がそのまま残っていたり、あるいは同じく教会に改変されたとはいえ多くの遺跡・遺物を残していた新城社、さらには個人の所有地になっている玉里社跡地を始め、神社跡地に多くの遺構・遺物を残しているのも、1972年の日中国交回復まで、日本が戦後、台湾の中華民国政府を中国の唯一の正統政府としていたということに見られる、日本と台湾の国家関係がその背景にあったのかもしれない。

第2に、「海外神社」跡地の現況、その景観変容の多様性は、神社跡地の属する国家やあるいは日本国の社会の変容にも関係があるということである。例えば、境内が公園になり、また本殿部分が有線電視台になっていることを紹介した中国の青島に建てられた青島神社の社殿は、実は日本の敗戦後、一時期、壊されずに中華民国の忠烈祠に改変されていた。[44] しかし中華民国政府が国共内戦に敗れ、中華人民共和国の支配に入ってからは、さらに改変され実業学校となった。ここまでは、第1の国家体制の転換、政治的要因に関わるのであるが、この段階でも社殿は残っていた。そして、この社殿部分が撤去されたのは、実は1960年代後半の文化大革命の時期であったのである。この時期、中国の多くの廟や寺院が破壊されたが、青島神社の社殿が破壊されたのもこの時であった。[45] 中国の神社跡地の景観変容を考える場合、この文化大革命の影響が大きかったのではないかと推測している。ただし、この文化大革命の影響も地域によってかなり差があるのも事実である。旧満洲（中国東北部）の場合、まだ事例が少ないが、文化大革命期を生き延びて社殿が残った例がかなりある。建国忠霊廟、新京神社、西安神社がそうである。また、公主嶺神社はかつて駅近くの公園の中に建てられていたが、現在、公園部分も含めて駅前商業ビルとなって跡形もない。しかし、1999年まで公園が存在し、社殿部分も公園管理事務所として転用され残っていたとのことである。さらに、撫順神社も社殿は一時放置されていたが、1950年代から公安局の事務所となり、また拘置所としても利用されていて、社殿が壊されたのは公安局が引越した1980年頃だとのことであった。鉄嶺神社も同じ様な運命を辿っている。中国の建国後、解放軍の被服廠として利用され、後、鉄道局の家族のアパートに転用され、この建物が鳥居とともに壊されたのは1988年10月頃だということであった。

また、開原神社や四平街神社も戦後すぐ、中国の一部の人たちによって金目のものや一部の部材が持ち去られ、建物の外廓だけがそのまま放置されていたが、それも文化大革命前に自然に朽ちていったとのことで、文化大革命期に壊されたのではないということであった。

文化大革命と中国の「海外神社」跡地の景観変容の関係についてはもう少し慎重に見ていく必要があろう。

また、台湾では、1945年の日本の敗北によって中華民国政府の支配下になるのであるが、2年後に起きた台湾住民（本省人）と中華民国政府（外省人）との衝突、いわゆる2.28事件の際、筆者が調査した

ものではないが、台中公園（台中神社跡地）の大鳥居が軍隊の手によって破壊されたり、また、台中の清水神社の社殿が、2.28事件の際、住民が立てこもったため、その後、軍隊によって破壊されたとのことである。[46]

このように、同じ国家、政治体制のなかでも、その時々の社会状況によって、「海外神社」跡地の景観が変化しているのである。

また、旧南洋群島の6つの神社が再建された問題にしても、第1に述べた政治的理由とともに、日本側の社会の変化というものも関わっていた。南洋群島の神社が再建される背景には勿論、それを推進した日本人慰霊団や民族派の青流社などの願い、思惑があるのだが、再建を受け入れる現地側の積極的理由として、日本人観光客（戦没者遺骨収集団や慰霊団、さらには戦前この地に大勢移住していた沖縄の関係者を含む）の積極的誘致という問題があった。

彩帆香取神社の再建にあたっては、日本の香取神宮連合会とともに、サイパンの観光局が一役買っていたこと、またテニアン島において旧神社跡地の草刈を月2回行っているのは、観光局の職員であった。さらに、同島のNKK神社跡地には、英語と日本語の解説板が立てられていたこと、日の出神社跡地が鳥居や燈籠を中心として公園化されていた等のことは既に見た通りである。この他、私たちがパラオ島で、南洋神社の再建運動に関わった現地の人から聞き取りした際、こちらからの質問でもなかったにもかかわらず、再建運動をしている日本の人たちが「特別」の思想を持った人たちであることを率直に語ってくれた。でも、それでも、それによって、その人たちを含めて、観光客が増えることの必要性を語っていた。[47]

ところで、ここが大事な点であるが、こうした日本人観光客の積極的誘致が可能であったのも、1980年代以降の日本社会のいわゆる国際化、海外旅行客・出国者の急増という日本社会の変化ということがあって、初めて可能であったということである。

第3に、いうまでもないことであるが、その国や地域の「開発」の度合い、経済発展の度合い、それと関連して、神社が建てられた場所が都市部・市街地か農村部であったか、また、都市部・市街地のなかでも中心部（平地）に建てられたのか、それとも山裾や丘の上に建てられたのかによっても、神社跡地の現況、景観変容の多様性が出てくるということである。

例えば、台湾の、神社の木造建築物を含めてそっくりそのまま利用している台湾の桃園縣忠烈祠（桃園神社跡地）、また木造建築物は残していないが、石造建築物を多く利用している天主教会（新城社跡地）などの例も、戦後（光復後）すぐには忠列祠や教会を新しく建て変える経済的余裕がない中で、それらを利用したまで、と考えることもできる。事実、先に紹介した台湾の高雄神社跡地に建てられた高雄縣忠烈祠の「高雄市忠烈祠重建記」によれば、「（前略）光復初期……殉国之壮烈乃就日人神社因陋就簡稍事修茸権作奉祀英霊之所……斯祠乃敵之遺物改建深為各界詬病……（後略）」とある。最初（光復直後）は、忠烈祠は高雄神社の社殿を少し改造して利用していたが、その後（台湾がそれなりの経済発展をとげた段階で）そのことが問題となったと言うのである。こうした経緯を経て、高雄縣忠列祠は1973年に全面的に建て替えられたのである。

また、桃園神社の社殿をほぼそのまま利用していた桃園縣忠烈祠は、1980年代後半にそのことが問題になった。台湾の経済的発展の中で、その余裕が出てきて、初めてそのことが浮上してきたのである。しかし、結局、これは日本の植民地支配の遺物として新たに読み替えられ、新たな価値を付与されることで、そのまま残されることになった。[48]

また、台湾の場合、比較的、神社遺構・遺物が多く残っていたのは、筆者が集中的に調査した地域が（22社中、18社）台湾東部の旧花蓮港庁下（現花蓮縣）であったことに影響されているのかもしれない。周知のごとく、花蓮港庁下を含む台湾東部は、漢民族の多い西部（大陸側）と異なり、アミ族を中心として先住民族の多い地域であり、西部に比較して「開発」の遅れている地域である。もし、西部のある地域を集中的に調査すれば、違った結果が出てきたかもしれない。

こうしたことは、旧南洋群島の神社の遺構・遺物

がよく残っているということとも関連する。

たとえば、旧南洋群島の神社はテニアン島に代表されるように、島の中心地に建てられた神社を除けば、多くは南洋興発株式会社が砂糖黍栽培のために作った農場・村ごとに（日本人のために）建てられた。しかし、敗戦後はこれらの地の多くは放置され、「開発」されなかったため、テニアン島のように連邦政府の手によって草刈が行われている場合は草地として、そうでない場合はジャングルの中に埋もれてしまい、結果として遺構・遺物がたくさん残っているという状況があるのである。

また、旧樺太も全体としては「開発」の遅れた地域である。泊居神社跡地は、鳥居、本殿基壇、燈籠台座、記念碑、忠魂碑と神社の遺構・遺物がほぼ全部揃って残っている例としたが、そこでも指摘したごとく、この地は泊居の街を見渡し、さらに海を見晴らすことの出来る、絶好のロケーションの地である。現在、草地のまま放置されているわけだが、もしも、この泊居の地の「開発」が進められ、人口が急増し、都市としての整備が必須になっていたならば、公園として整備されてもよい地である。しかし、旧ソ連邦時代でも「開発」が進められなかった旧樺太の地域は、特にペロストロイカ政策の展開、そしてソ連邦の崩壊後の「自由主義経済」の進展の中で、一部の地域を除いて、ますます経済的困難が増しているようである。この泊居の地は、旧樺太時代、漁業の他に王子製紙の工場街として発展した街である。この神社跡地の真下にはその広大な工場が残っている。そしてそれは旧ソ連邦時代でも稼動していたが、ペロストロイカ政策の中で操業を停止し、今日では泊居に電力を供給する火力発電所として、細々と稼動している状況であった。こうした泊居の経済発展の遅れが、結果として多くの神社遺構・遺物を残しているのである。

先に、中国における文化大革命と神社跡地の景観変容について触れた時、少なくとも私たちが調査した限りにおいては、旧満洲地域の神社遺構が文化大革命の影響を受けた様子が見られなかったのも、旧満洲地域が全体として中国の中にあって経済発展の遅れた地域であったということ、したがってイデオロギー（日本軍国主義の残滓の消去）による社殿等の破壊よりその経済的価値が優先され、その利用が優先された結果であるということを示しているのかもしれない。

また、都市部、街の中の平地に建てられた神社は、新城社のように教会に改変され、その遺構・遺物がよく残っている例もあるが、多くは経済的発展に伴い、公園として整備されたり、また大きな建物が建てられたりして、区画はなんとなく残されているが、神社の遺構・遺物はほとんど残っていないし（吉林神社、沙河港神社、北京神社、天津神社等）、そもそもその区画も変容をうけ、位置さえ確定できないものもある（台東鎮神社）。満洲の満鉄附属地に建てられた神社（満鉄附属地神社）も同様である。満鉄附属地の多くは駅を中心とする平地に位置しているが、附属地神社はその中でも多く公園内に、また公園に接して建てられた。先に述べた社殿が残っている新京神社は別として、市街地の発展と共に体育館や軍関係施設（奉天神社）、市役所（開原神社）、駅前の商業ビル（公主嶺神社）、軍関係施設（四平街神社）に改変され、神社の遺構・遺物は全く残っていない。また、鉄嶺神社は公園部分はきれいに整備されて残されているが、ここにも神社の痕跡は全く残っていない。

第4に、神社跡地の景観変容の多様性は、その地域の文化伝統の違いと関連しているということである。

南洋群島ロタ島のロタ神社や和泉神社が教会祠に改変され、また教会ではないが、サイパンの南興神社がキリスト教の墓地に改変されていた。これなどは、南洋群島が日本の委任統治領になる以前、400年にもわたるスペイン支配、その後のドイツの支配の中で形成されてきたキリスト教（カソリック）文化の浸透・定着がその背景にある。

また、台湾でかなりの神社が忠烈祠となっていた。忠烈祠の思想は、日本の靖国・護国神社と同じく、勿論、近代の国民国家による国民統合という新たな思想であるが、それにしても、人を神として祀る文化伝統の存在も見逃せない。また、神社の社殿がそれに利用されるということも、国、地域によって細

かな部分での違いはあるものの、全体として見た場合の、日本、朝鮮、中国の廟、寺院、神社の社殿建築（燈籠や狛犬や鳥居も含む）の類似性という事も横たわっていよう。とくにこの点で旧満洲国の建国忠霊廟が破壊されず、そのまま残されている点について、その建築様式が日本の神社様式そのままではなく、中国風（満洲風）様式を加味した社殿であった事も関係しているかもしれない。

最後に、5点めとして、以上の4点とは少し次元が異なるが、その他における支配者が交代したことの「刻印」という点にふれておこう。神社跡地に教会や寺院、廟、あるいは忠烈祠が建てられたという問題である。

世界史的に見た場合、かっての支配者の宗教施設であったものを完全に破壊せず、むしろその痕跡を残しながら、その地に新しい支配者の宗教施設を造るというのが、宗教勢力交代の一つのパターンであるということである。旧支配者の宗教施設を徹底的に破壊し、その痕跡を完全に消してしまったり、全く別の所に新しい支配的宗教施設を造るより、その方が支配者の、また宗教勢力交代の印象を強く民衆に焼き付け、「刻印」し、かつての支配的宗教に対するダメージになるということである。

このことは、すでにインドの宗教紛争の発火源である、北インドのヒンズー教の聖地アヨディアにあるモスク（イスラム礼拝所）の例や、スペインのコルドバ観光の目玉商品であるメスキータというモスク（イスラム寺院）がなぜ「醜い」外観をもっているかを例に紹介しておいたので、詳しくはそれを参照してほしいが、[49] 1966年に台湾を訪問した日本神職たちが、「形骸は殆んど昔ながらの姿をとどめながら」（この時点では、筆者〈ら〉が調査した1990年代以降よりも、神社跡地にはもっと多くの木造建築物を含む神社の遺構・遺物が残されていた＝筆者）、忠烈祠という「全く内容的に変質された神社跡地に立ったとき」、「一種名状しがたい惨たる感慨が胸にこみあげて」、「ひそかな憤りを覚えた」。そして、点々として残っている鳥居や燈籠や狛犬などは「いっそこれらも除去してくれればよいのに、という気持ちになった」[50]と述べていることと関連することである。

こうした、支配の交代の「刻印」という点では、第1の政治の問題と絡むが、神社跡地が公園として整備あるいは再整備された場合、公園の名称や公園の造作物に植民地支配の打破を、あるいは新しい国家の成立を印象づける（この中にはいわゆる「伝統の創造」も含む）名称が付けられたり造作物が建てられる。台湾の神社跡地で、壽社が中山公園として利用され、孫文の銅像が建てられていることを紹介したが、台湾において神社跡地が中山公園として利用されている例は他にも多くみられる。樺太神社跡地が勝利公園として整備され、兵士の銅像が建てられているのも、また、名称はそのことを意味していないが、公園の造作物として、南山公園（朝鮮神宮跡地）に安重根の記念館や龍頭山公園（龍頭神社跡地）に李舜臣の銅像が建てられていることなどは同じ意味合いを持つものである。

もっとも、近代の国民国家における公園は一般的にそういう性格を持っており、神社跡地だけがそのようになったわけではないが、神社跡地におけるそのようなことは、日本の支配の終了と新しい国家の誕生を人々により強く「刻印」する上で大きな役割を果たしたであろう。

以上、「海外神社」跡地の多様な景観変容の要因といったものを、5点にわたって指摘してきたが、実際は、これらの5点の内のいくつかが相互に絡み合って増幅しあい、また消しあって、今日の神社跡地の景観の多様性を形作っているのである。

本稿で紹介した神社跡地の現況とは、あくまでも筆者の調査時点での現況である。調査年で最も早い例は1990年であり、また本格的に始めたのも1992年と、いずれも10年以上も前のものである。確認していないが、その調査時点での現況、景観は、今日、2006年段階ではもう、異なった物になっているかもしれない。また、これからも変化していくであろう。しかしながら、その異なりあるいは変化も、上に述べたような5つの要因が相互に絡み合って変化したもの、あるいは変化していくものであるということだけは言えるのではないかと考えている。[51]

おわりに

以上、神社跡地の遺構・遺物の残存状況、神社跡地の景観変容の四類型、さらに景観変容の五つの要因について、これまで筆者が訪れた100余の神社跡地を素材に検討してきた。最初に述べたように、1600余の神社跡地の内の約6％というサンプル量の少なさ、とりわけ旧台湾や旧朝鮮あるいは旧満洲、旧樺太のような多くの神社が建てられた地域については、この程度のサンプル数で結論を出すのは慎重であらねばならぬ。この論考がきっかけになって、今後、多くの研究者によって、とりわけ現地の研究者によって、この神社跡地の研究が進展することを期待する。

また、この論考が果たしてCOEの全体テーマ、さらには3班のテーマに迫ることになっているのかどうか、大変心もとない次第であるが、ともかくも中島の10数年にわたる、そしてCOEの5年間にわたる共同研究のとりあえずの成果としたい。

（文責　中島三千男）

【謝辞】

本稿作成にあたり、COE 5年間の海外神社グループの調査活動の中で、それぞれ1年限りであったが調査を共にされた、藤田庄一、大里浩秋、孫安石、大坪潤子、サイモン・ジョン、金花子、川村武史、堀内寛晃、尚峰の各氏に対して厚く感謝申し上げます。また、現地調査にあたり国内外の多くの研究者・市民にお世話になった。そのお一人お一人については、その都度の報告書の中で氏名を記して謝意を表しておいたが、ここに改めて謝意を表する次第である。

なお本編をまとめるにあたり、データ処理等で磯貝奈津子氏にも大変お世話になった。

（なかじま・みちお／つだ・よしき／とみい・まさのり）

【注】

(1) 佐藤弘毅「戦前の海外神社一覧Ⅰ—樺太・千島・台湾・南洋—」（『神社本庁教学研究所紀要』第2号、1997年3月）、同「戦前の海外神社一覧Ⅱ－朝鮮・関東州・満洲国・中華民国—」（『神社本庁　教学研究所紀要』第3号、1998年2月）、同「終戦前の海外神社一覧」（薗田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』付編1133～1192頁、吉川弘文館、2004年）、中島三千男「<海外神社>研究序説」（『歴史評論』602号、2000年6月）など参照。なお「海外神社」の詳しい定義等については、中島論文参照。

(2) この、3班の課題については、香月洋一郎「環境と景観の資料化と体系化」（神奈川大学21世紀COEプログラム拠点推進会議『非文字資料研究』No.1，2003年10月）参照。

(3) 厳密には旧関東州の調査は2004年3月であり、すでにCOEの活動は開始されていたが、この調査は木場明志を研究代表者とする科学研究費補助金の調査であった。
これらの成果については、中島「台湾・旧花蓮港庁下における神社の創建について」（岩井忠熊・馬原鉄男編『天皇制国家の統合と支配』、1992年、文理閣）、同「台湾の神社跡を訪ねて」（『歴史と民俗』10号、1993年8月、神奈川大学日本常民文化研究所）、同「戦前期・中華民国における海外神社の創立について」（『研究年報』20号、2002年3月、神奈川大学法学研究所）、同「旧満洲国における神社の設立について」（木場明志『植民地期中国東北地域における宗教の総合的研究』、文部科学省科学研究費補助金（課題番号13410011）研究成果報告書、2005年3月）を参照。また、COEの共同研究開始以降に中島が個人名で発表したものに、中島「海外神社—日本が忘れた宗教施設—」（鵜飼政志他編『歴史をよむ』、東京大学出版会、2004年11月）、同「旧満洲国における神社の設立について」（木場明志他編『植民地期満洲の宗教』、柏書房、2007年9月）がある。

(4) 海外神社の全体像及びその研究史、今後の課題等は、注（1）の中島論文参照。これ以降については、菅浩二『日本統治下の海外神社—朝鮮神宮・台湾神社と祭神—』（弘文堂、2004年9月）、青井哲人『植民地神社と帝国日本』（吉川弘文館、2005年2月）、本康宏史「研究展望：<帝国>史の視点と植民地神社研究—青井哲人『植民地神社と帝国日本』をめぐって—」（『日本史研究』529号、2006年9月）等参照。

(5) 冨井正憲、藤田庄市、中島三千男「旧樺太（南サハリン）神社跡地調査報告」（神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、2004年3月）、藤田庄一「奉安殿<発見>記」（『非文字資料研究』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月）等参照。

(6) 冨井正憲、中島三千男、大坪潤子、サイモン・ジョン「旧南洋群島の神社跡地調査報告」（神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、2005年3月）、大坪潤子「南洋群島に神社をたずねて」（『非文字資料研究』第6号、神奈川大学21世紀COEプログラム研

究推進会議、2004年12月）等参照。

(7) 津田良樹、中島三千男、金花子、川村武史「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討―全羅南道、和順郡を中心に―」（神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、2006年3月）、金花子「韓国全羅南道の旧神社跡地調査報告」（『非文字資料研究』第10号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年12月）等参照。

(8) 津田良樹、中島三千男、堀内寛晃、尚峰「旧満洲国の<満鉄附属地神社>跡地調査から見た神社の様相」（神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、2007年3月）、堀内寛晃「中国東北部、旧満洲の旧神社跡地調査報告」（『非文字資料研究』第14号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年12月）、津田良樹「幻の<満洲国>建国神廟を復原する」（『非文字資料研究』第16号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月）等参照。

(9) すでに中島は「海外神社跡地に見る景観の変容」（神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料1『環境と景観の資料化と体系化に向けて』、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年11月）において、この視点から仮説を展開した。本稿は、基本的にこの仮説の立場に立ち、その後の旧朝鮮、旧満洲の調査で得た事例を付け加えたものである。

(10)「暴民の為に真先に襲撃」された（小笠原省三『海外神社史第1輯祭神編』、海外神社史編纂会、1952年8月、1頁）。また、旧朝鮮においては、1945年8月16～23日の1週間の間に、「神祠・奉安殿に対する放火・破壊」が136件と、「警察署に対する襲撃・占拠」などの149件に次ぐ多さであった（森田芳夫『朝鮮終戦の記録―米ソ両軍の進駐と日本人の引き揚げ―』、巌南堂、1964年、94頁）。
終戦前後の海外神社のあり様は多様であった。上記のように、放火・破壊された神社（安東神社等）、戦闘・空襲によって炎上した神社（天仁安神社等）、日本人（軍）によって爆破されたり（昭南神社等）、焼かれた神社（南洋神社、朝鮮神宮本殿、建国神廟等）、また米ソ両軍や現地政府に接収された神社（新京神社等）などであった。この点については、『神社本庁十年史』（1956年、神社本庁、41～49頁）及び佐藤弘毅「戦前の海外神社資産一覧」（『神社本庁教学研究所紀要』第4号、1999年2月）参照。

(11) 表1の46仮称「（南洋コーヒー）神社」については、本稿脱稿後、坂井久能氏を介して、サイパン在住の上澤祥昭氏から情報をいただいた。それによると、南郷神社と言われていたこと、また本殿近くの洞窟はサイパン戦初期に戦闘指揮所が置かれ、黒木砲兵大隊が直轄していたとのことである。

(12) 本稿で紹介する、神社の創立年、祭神、境内地などの基本的事項については、注（1）の佐藤弘毅の仕事によった。

(13) 注（5）論文参照。以下本文において紹介する旧樺太の神社の現況については全て、この論文参照。

(14) 注（3）の中島『歴史と民俗』所収論文参照。以下、本文において紹介する旧台湾の神社の現況の内、1992年の調査に関わるものは、この論文を参照。

(15) 忠烈祠については、蔡錦堂「台湾の忠烈祠と日本の護国神社・靖国神社との比較」（台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』2003年3月）参照。忠烈祠とは、中国における伝説上の帝王で中国（文化）の始祖とされる黄帝、17世紀半ば明朝再興を掲げて清軍と戦い、オランダの支配から台湾を解放した鄭成功、また日清戦争後の日本の台湾領有に対して、「台湾民主共和国」の創立を宣言し、抗日武装闘争で闘った「台湾革命烈士」、また中華民国の建国から国共内戦の過程で倒れた「民国革命先烈」等を中心に、いわゆる「国事殉難者の軍人官吏等」を祀ったものである。

(16) 建国忠霊廟については、矢追又三郎「建国神廟、建国忠霊廟」（『満洲建築雑誌』第28巻、満洲建築協会、1943年1月）、島川雅史「現人神と八紘一宇の思想―満洲国建国神廟―」（『史苑』43巻2号、1984年3月）、嵯峨井建「建国神廟と建国忠霊廟の建設」（『神道宗教』156号、1994年9月）等参照。

(17) 2002年8月調査段階。2006年8月調査の段階でも、なお文化財としての指定はなされていなかった。

(18) 注（8）論文参照。

(19) 注（7）論文参照。小鹿島更生園は官舎地帯と病者地帯にはっきりと区別され、小鹿島神社は官舎地帯に、病者地帯にはその分社が建てられた。（写真59）説明文の下方右側の写真が分社の写真である。
小鹿島の療養所の入所者たちは神社への参拝を強制され、朝鮮人として、またハンセン病患者として二重、三重の差別を受けたといわれている。

(20) 注（8）論文参照。

(21) 関子嶺神社の話については、注（3）の中島『歴史と民俗』所収論文参照。ただし、台湾の関子嶺神社という神社は、注（1）の佐藤論文等では確認されていない。

(22) 横森久美「台湾における神社」（『台湾近現代史研究』4号、1982年10月）、菅浩二「台湾最初の神社御祭神とナショナリティ―台南・旧開山神社（鄭成功廟）について―」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第88輯、2001年）参照。

(23) 注（7）論文参照。なお神祠とは旧朝鮮の独自の神社制度で、神社には本殿、拝殿、鳥居、手水鉢、社務所等の諸施設を設ける事が義務づけられていたが、資金等の理由でそれが不可能な場合、とりあえず、本殿、拝殿と鳥居、あるいは本殿と鳥居だけの簡易なる神祇奉斎施設を作ってそれに代えた。これを神祠という。また、この神祠には普通の神祠と天照大神を祀る神明神祠とがあった。この点についても注（7）論文参照。なお、旧台湾ではこうした簡易なる神祇奉斎施設は社または祠と呼ばれた。

(24) 現在のところこの5つの神社の他に、今回の調査では足を延ばすことが出来なかったが、アンガウル島（パラオ共和国）のアンガウル神社がある。また他の地域の例としては、現地ではなく日本国内に再建された例として、旧関東州の関東神社がある。これについては、注（36）参照。旧南洋群島の神社及び現況については、『具志川市史』第4巻（2002年3月、同市編さん委員会編）の第3編第2章の「南洋群島」（今泉祐美子執筆）、『沖縄県史ビジュアル版9　近代②　旧南洋群島と沖縄県人―テニアン―』（2002年）、及び、第4回海外神社視察研修団『サイパン・パラオ戦没者慰霊の旅（報告書）』（1982年9月、神社本庁）も参照。

(25) 注（6）論文参照。以下、本文において紹介する旧南洋群島の神社に関する概況は全て、この論文による。

(26) 南洋神社については、『官幣大社南洋神社御鎮座祭記念写真帖』（1941年、同神社奉賛会）参照。

(27) ペリリュウ神社については、名越二荒之助『世界に生きる日本の心』（1987年、展転社）、滑川祐二『ペリリュー神社再建由来記』（1982年、ペリリュー神社奉賛会事務局）参照。なおペリリュウ神社は1934年に南興神社として創立されたとの説もある（NPO南洋交流協会ホームページ）。また再建された神社はペリリュー神社と表記されている。

(28) 清流社については、注（6）の『年報』所収論文の注（7）、（8）参照。

(29) このNKK神社については、注（1）の佐藤論文にも、『神道史大辞典』にも出ていない神社である。この神社と後出の日の出神社との関連が不明である。この二つの神社は極めて近接した位置に建っており、日の出神社は佐藤の研究によれば、1939年に創立せられた神社で、その氏子区域は第4農場となっている。ところが、NKK神社も創立年は1941年とズレているが、氏子区域はやはり第4農場である。この点は、今後の調査に待ちたい。

(30) 昭南神社及びその現況については、シンガポール日本人学校・小学部社会科担当部会「昭南神社」（シンガポール日本人会編『南十字星』4号、1992年）、篠崎護『シンガポール占領秘史』（原書房、1976年）の211～214頁、参照。

(31) 注（7）の論文参照。

(32) この神社建設の位置、都市空間の中における位置付けについては、青井哲人『植民地神社と帝国日本』（吉川弘文館、2005年）参照。

(33) 満鉄附属地神社については、注（8）の論文参照。

(34) 佐久間神社創建の事情については、山口政治・富永勝編著『東台湾太魯閣小史―研海支庁開発の歩み―』（1991年2月、花蓮港「新城・北埔会」）参照。

(35) この碑の成り立ちについては、石上正夫『日本人よ忘るなかれ―南洋の民と皇国教育―』（1983年9月、大月書店）215～216頁参照。

(36) 大連神社については、水野久直『明治天皇御尊像奉遷記』（1966年、赤間神宮社務所）、『大連神社八十年史』（大連神社八十年祭奉賛会、1987年）、新田光子『大連神社史―ある海外神社の社会史―』（1997年、おうふう）等参照。なお大連神社は、1947年3月ソ連側に引渡されたが、大連神社社司水野久直は3月同社の御神霊を捧持して帰国、赤間神宮禰宜に就任とともに復興（遷宮）事業に乗り出し、1980年赤間神宮境内に大連神社新社殿を竣工し、正遷座祭を行った。

(37)『神社本庁十年史』によると、新京神社はソ連軍の宿舎として利用された。また、嵯峨井前掲書によれば戦災孤児を救済する孤児院として利用されたとある。

(38) 亜庭神社については、樺太・元亜庭神社社司山田信義「終戦と亜庭神社」（社報『さがみ』第61号～67号、1978年10月～1976年4月）参照。

(39) これについては、注（35）の石上前掲書、210～211頁参照。

(40) これについては、『北海道神社庁誌』（1999年、同編輯委員会編）の第2部第4章「樺太の神社」（執筆前田孝和）参照。

(41) 関東神宮については、石川佐中『関東神宮―悲劇の三百二十二日―』（1987年）参照。

(42) 台湾神宮については、蔡錦堂『日本帝国主義下台湾の宗教政策』（同成社、1994年）、本康宏史「台湾神社の創建と統治政策―祭神をめぐる問題を中心に―」（台湾史研究部会・檜山幸夫『台湾の近代と日本』、2003年、中京大学社会科学研究所）、菅浩二「台湾神社創建から戦時体制、廃絶まで―1901～1945―」（川村邦光編『戦死者を巡る宗教·文化の研究』2003年、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室）参照。
なお、又吉盛清『台湾　近い昔の旅―台北編―』（1996年、凱風社）では「1945年（昭和20）の敗戦によって、台湾神社は中華民国に接収された。この侵略主義のシンボルは、接収と同時に大槌やつるはしでもって徹底的に打ち壊されて跡形もなくなってしまった。打ち壊しは、長年の占領下の恨みを晴らすかのように進められたという。三基の鳥居はなぎ倒され、本殿は廃材となった。……台湾神社は台湾の地から消えてしまった」（270頁）としているが、1966年3月に行われた神社新報社の現地調査では、燈籠、狛犬、玉垣の一部などはまだ転々と残っている、旧手水舎も残る、としている（「台湾に旧神社故址を訪ねて／意外に多い社殿転用／忠烈祠や軍隊の施設等に」、『神社新報』1966年4月23日、第94934号）。なお、この調査結果は注（3）の中島『歴史と民俗』論文、117頁から119頁に一覧表で掲載している。

(43) 北京神社については、小笠原省三『海外神社史　上巻』（海外神社史編纂会、1953年）の「北京神社の奉斎まで」（251～273頁）参照。

(44)『青島指南』（民国22年<1947年>、中国市政協会青島分会）に「山之西面有勝利後所建之忠烈祠（日本神

社旧址)、斎祀抗戦八年戦区殉難軍民之英霊」とある。

(45) 青島市档案館の職員からの聞き取りによる。

(46) 注(42)の『神社新報』の記事による。

(47) 日本人の旧南洋群島地域の観光客は1970年代ごろから急増。97年以降減少に転じたが、2000年から回復に向かっている。北マリアナ地域では全体の観光客は約50万人、その内の約75%を日本人が占める。

(48) 台湾大学呉蜜察氏の御教示による。

(49) 注(3)の中島『歴史と民俗』掲載論文105頁参照。

(50) 注(42)の『神社新報』の記事による。

(51) もっとも、海外神社跡地が、戦後どのような現況を持ち、その景観を変容させているのかは、注(10)で見たように、日本の敗戦前後に神社がどのような処遇を蒙ったのか、という事にも規定されている。しかし、この点の研究は今日十分に行われていないので、この点の組み込みは後日を期したい。ただ、例えば、新京神社も大連神社も共に、その時期に社殿の破壊がなされなかったにもかかわらず、今日、神社跡地の現況、景観の変容を異にしているのを見ても、現在の段階で析出した景観変容の5つの要因は有効であると考えている。